

常磐線

相模臺

▲松戸驛。

松戸は古來濱街道の要衝に當る。延喜式馬津の渡の遺蹟である、近世市川宿と同じく御番所がおかれてあつた。此地の高等園藝學校は、東洋屈指の譽れが高い。この町の東方が相模臺であつて、天文六年國府臺合戰の時、小山義明の兵が物見した所と云はれてゐる。國府臺迄約三十町である。

東北一里廿六町に小金町がある。江戸幕府の時官馬を放飼した小金原(古名裏)は、今では開墾せられた。千葉頼胤創始の小金城址は、小金町にある。又小金に、一月寺址がある。一月寺は、名高き虛無僧寺であつたが、明治四年、虛無僧普化宗の一派を停止せられ、寺

も廢された。

流山

▲馬橋驛より流山鐵道に乗る。(三哩五分)

小金の西北一里、松戸の北二里、江戸川の東岸により水運の便にとみ且つ風光頗るよい。流山と云ふ地名の起りは、町の南偏にある赤城明神を祭つた小丘に名づけしに始まるのである。往時荒茫の日にあたり、此丘も江中にありて、形狀流移する者に似たるが故である。この地は醤油、味醂の産地で、味醂は安永年中以來、江戸に於いて聲價を博するに至つた。

野田

▲柏驛から北總線に乗替へ野田驛下車。

流山の北三里、江戸川東岸にあり醤油の製造地として知られてゐる。河岸を中野臺と云ひ風光愛すべきものがある。堤臺にたゞせ給ふ八幡神社は、地方屈指の古祠で、八月に盛大なる祭禮を行つてゐる。戦國の頃には、公方成氏の臣野田有馬助の城があつた。

關 宿

野田より四里二町。汽船の便がある。利根川江戸川の分派する所で、舟航必由の要所である。江戸幕府は、此の地に城壘をおき、又關柵を設けて、往來を監視してゐた。地名は關屋津の義で、中古此江津の隘吭を利して、關柵の設を創めしによる。町の北に關宿城址がある。足利の臣築田氏の築し所で、世々古河公方に隸してゐた。近世安永後は、久世氏の居城であつた。戊辰の役、江戸脱走の諸隊は、こゝにより官軍に抗したが、永く抵抗することは出来なかつた。

布施辨財天

▲我孫子驛より八町。

布施の辨財天は、關東三辨天の一である。七里渡の渡頭にある。七里渡とは、往時布施より取手へ至る渡しで、小道七里ありしが故であるが、今は形勢に變化を來たしてゐる。布施と云ふ地名は、古代の渡津に、盧屋を設けて、行旅の人を救護したに起因する。この地の布施も、この意義に他ならない。利根國志に、布施村は、小金より水海道へゆく手なり。田中に孤山あり。古へは湖中の島なりしとぞ。辨財天堂あり」と。
縁起云ふ。

「地はもと一帯の沼地なりしが、大道年間紅龍あらはれて、土塊を捧げて一島を作る。里人の一人夢想に感じ、光明を尋ねてゆけば、一體の辨財天あり。即ち小祠を作りて之を祀る。後弘法大師巡錫してこの地に至り、奇靈をきゝてその像を一見すれば、何んぞ

計らん自作の像にして、曾て伊馬國朝來郡筒江に安置せしものならんとは。即ち大師直ちに朝廷に請うて勅許をえ、弘仁十四年に伽藍建設の事業を終れりと。

本多重次墓

▲取手驛下車。取手は、利根大江の要路であり、且つ水戸街道の要衝である。驛前に平將門の創建と云はれる長禪寺がある。又、町の西大鹿に關東十八壇林の一たる弘經寺がある。寺の南に天正の頃豪族大鹿左衛門尉の居城した址がある。

本多重次の墓は、町の東北井野にある。一小丘で、世人は、御墓山と稱してゐる。重次は作左衛門と稱し、剛毅忠勇、世に鬼作左と云はれて、名を轟かした。後家康の怒にふれて上總國古井戸に屏居し、ついで此地に移り、慶長元年に病歿した。この附近の本願寺境内に、重次の碑がある。

相馬古城址

▲取手驛より常總線に乗り替へ、守谷驛下車、東北十一町に將門館址がある。

相馬古御所は、一に相馬城址と稱し平將門が、一時關東に覇を唱へた所である。殘壘の上、老松二株を植ゑ、將門城址と誌せし碑の邊り、懷古の情をそゝらしめる。相馬日記に「守谷野はいと廣き野にて、日も遙かに霞むのみなり。是れ將門が、相馬偽都の構の内なり」と。吉田博士は「世俗之を以て將門偽都址となすは、誤恕も甚し」と云ふてゐるが、一説として見るべきである。博士は、「將門の營館は猿島郡石井郷なり」と主張してゐる。守谷は、相馬御厨の中なれば、千葉師常此に移り、相馬と號した。師常が、將門の遺址に城をしつらへたのである。天正十八年、土岐定弘此所に封ぜられ、次いで堀田正俊がゐる。

たが、堀田氏が古河城に移されたので、城はつひに廢された。

守谷町の南に、雄護山西林寺と云ふ古刹がある。相馬胤繼の中興した氏寺で、近世相馬妙見祠を舊城中から茲へ移した。妙見祠は俗信的となつてゐる。町の東南一里、山王村の佛島と稱する小丘を古來將門の墓と云ひつたへてゐる。

参考 吉田博士が、平將門の偽都址と主張する猿島郡石井は、水海道の西北二里半。今では、偽都偽宮の址みるべきものはないが、博士は扶桑略記、今昔物語の記事に依つて、この地を將門偽宮址と所定せられたのである。一説としてかゝげておく。

飯沼弘經寺

▲常總線水海道驛より、西北三十町。

水海道は、西に鬼怒川、北に小見川を帶び、水運の便に富んでゐる。相馬日記に、「昔平將門が相馬の偽内裏造りしをり、相馬郡大井の城をもて京の大城に比べしよし、將門記や今昔物語に見え

たれば、此所がその址なるべし」と見えて居る。

弘經寺は、淨土宗關東十八壇林の一で應永二十一年横曾根の城主羽生經貞を壇越として創建せられた古刹である。祐天僧正も年若き頃、この寺に住し、怨婦累が悪靈を教化したことがある。家康の孫で秀頼の夫人になつた天樹院の墓がある。

大寶城址

▲常總線大寶驛より十町。

大寶城は、吉野朝の忠臣であつた下妻氏累代の居城であつた。城址は大寶八幡宮(下妻八幡宮)のある關山(寺山)の南である。城は昔三方水に圍まれたと云ふことだが、今、城址の西にある平沼新田は享保十一年の開發である。

千 妙 寺

▲常總線黒子驛下車三町。

黒子は、「和名抄、新治郡月波郷、訓都木波」とある内である。千妙寺は、境内廣く、殿堂又大である。昔は密宗であつたが、長沼宗光寺の法脈をうけて台家となり、一時は末寺門徒一百有餘を有して、時めいた。舊幕府時代には朱印百石の寺であつた。

關 城 址

▲常總線黒子驛の西南三十町。

關の城址は、大寶沼の北岸、關館村の字内館にあり、大寶湖中に斗出したる三角形の地である。南に沼を隔て、大寶城址の茂林をのぞむ。今城址に存するは、鎮守八幡社（城址當りに）鐘樓堂の跡、土壘高丘のみである。興國年間南朝の忠臣北畠親房の南朝の爲めに義

軍を起した所である。史家の一度は杖を曳かねばならぬ所である。

新嘗常陸國誌の大意に曰、「興國二年北畠親房小田城を出て關城に遷るや、賊將高師冬從ひて之を合圍す。尋で僧圓琳を城中に遣はし和を勸む。親房答へず。是時に當り關東の地官軍守る所僅に六城、常陸を關大寶、伊佐、眞壁、中郡さいひ、下野を西明寺と曰ふ。越えて翌々四年師冬賊兵を駈り、野草を運搬して關城の塹を埋め、又礦夫數人を募り、横に地道を鑿り榑櫓を穿ち、棚を門外に植ゑて嚴に官軍の出路を塞ぐ。官軍亦城中より地道を穿ち草を奪ひ棚を拔く、適賊の地道崩壊し礦夫壓死する者あり。師冬其策益無きを知りて之を罷む。先是親房屬書を結城親朝に與へて出援を促せども親朝躊躇して決せず、却て尊氏の甘言に惑はされて意兩端を抱けり。七月親房又書を親朝に與ふれども、親朝既に賊に通じ終に援を出さず。八月師冬大船を大寶沼に泛べ骨を連れ黒子に達し、晨夕巡邏し嚴に水陸往返を斷ち、齊く起つて、關大寶二城を攻む。是に於て二城の聲息全く絶え官軍窮蹙す。冬兩城陷る關宗祐及子宗政下妻泰並に之に死す、親房逃れて吉野に歸る。於是伊佐眞壁中郡等或は降り、或は陷る。親房初めて常陸に上陸し、神宮寺城に據りしより、此に至つて前後凡六年、關城にあること五年なりと云ふ。」

下館城址

▲常總線及び水戸線下館驛下車。

下館は中世伊佐氏の據有せる所で、伊佐氏衰へし後も、地方の名邑として今日に至つた。

城址は市街の北にある。勤行川の東北、傍を流れ、丘陵の背景にある。天慶年間藤原秀郷の築城にかゝり、近世結城秀康此地に封ぜられて以來城主は暫々かはつたが、維新に至る迄地方の名城であつた。

結城城址

▲水戸線結城驛下車。

町は中世結城氏此におり、城下町として發達した。今に猶地方の名邑である。結城紬を名産としてゐる。華藏寺（結城氏創立、臨濟派の禪苑）

稱名寺（一向宗關東七大寺の一）弘經寺（文祿四年秀康卿の再建、關東十八壇林の首位）安穩寺（源和尙の墓）がある。

城址は、結城町の東北にある。所謂平城である。治承年中結城朝光の初築と云ひつたハてをる。中納言秀康（家康の庶長子）慶長六年越前へ移封せられてから、一時廢墟となりしも、元祿十六年以來水野氏一萬八千石の封地となり、城は再築せられた。絹川日川の水を引きて四方を圍繞せしめ人工の妙をつくしてゐる。

稻田御坊址

▲稻田驛より八町。

稻田御坊は親鸞上人の草庵のあつた所で、一宗開立の基を始めし所である。宗派信徒の靈蹟として、最も信仰する所である。寺は中世兵火の爲めに焼かれたが、二百餘年前再興して今日に至つた。御坊の東に、式内の古祠稻田神社（姫宮）がある。

親鸞繪傳に曰ふ、「聖人、越後より常陸に越えて、笠間郡笠間郷といふ所に隱居し給ふ。幽栖を占むと雖も道俗跡を訪ね、法戸を閉つと雖も貴賤衢に溢れ、佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念忽ちに満足す。この時聖人仰せられて曰く、救世菩薩の告命をうけし古の夢、すでに今と符合せり云々。」

龍ヶ崎

▲佐貫驛より龍ヶ崎鐵道に乗れば、終點が龍ヶ崎である。古來地方の名邑で、此地に源三位頼政の墓と稱するものがある。町の東北字稻塚の一葉松の邊は昔官道の通じた所で、松についての古歌が多い。今より八九百年前迄は、この邊迄霞ヶ浦が侵入してゐた。

城址は、町の北方山上にある。天正年間土岐左衛門尉頼貞の據つた所である。鹿島みちの記に、

「四方に堀のかたありて築立たるやうなる山城なり。樹木枝を蔽ひ茂り合ひたる中に太神宮鹿島の神の社あり。上は平かにして中に谷を隔て、二の曲輪を構へしと見えたり。その曲輪の東に龍ヶ峯といへるところあり、爰に臨みて見渡し侍るに東は鹿島の海見えて眺望かぎりなく、南は四面はるかに續きたり云々。」

金龍寺

▲佐貫驛の東方十町。

曹洞宗の名刹である。應永年間、天真自性禪師か、新田義貞の菩提の爲めに開基したものである。始め上州新田郡金山にあつたのだが、豊臣秀吉の命で牛久に遷され其後今の地に遷つたのである。

本尊は、弘法大師作如意輪觀音像で、胎内に義貞身代りの薬子觀音が藏せられてゐる。寺寶として唐の李龍眠筆十六羅漢は稀世の逸品である。

土浦城址

▲土浦驛下車。

霞ヶ浦に臨み、濱街道中、東京以北の繁華な町である。宇明神に平國香の墓と稱するものがある。俗に五總明神と云はれ、毎年九月二十三日の大祭は、地方屈指の御祭りである。西子岡公園は、櫻花の多いので有名である。

城は町の中央にあり、霞ヶ浦に臨み丘陵其南北を擁してゐる。平將門の所築と云はれるが確證はない。永享中若泉氏以來地方の名城として、維新の廢城に及んだ。幕末には、土屋氏九萬五千石の城邑であつた。

藤原藤房遺髮塔

▲土浦より筑波鐵道に乗り、藤澤驛下車約一町。

藤原藤房卿、當國配流の時の屋敷跡は、驛前の丘陵にある。傍らに、藤房遺髮塔がある。藤澤城址は天正元年、小田氏治が太田三樂に追はれて、小田城を出で、此に據つた所で天正十八年廢城となつた。

小田城址

▲筑波鐵道小田驛より四町。

小田は元の名は三村郷であつたが、八田知家の子知重之れに居り、在名をとつて小田氏を稱した。小田氏は、南北争亂の際、始め王事に勤めたが、後賊黨に興みした。後佐竹氏に破られて、封邑を失つた。

城址は、小田氏の居城で、准后親房が神皇正統記、職原抄を著した所である。城は方五町許り壘濠の形狀猶たすねることが出来る。

多氣城址

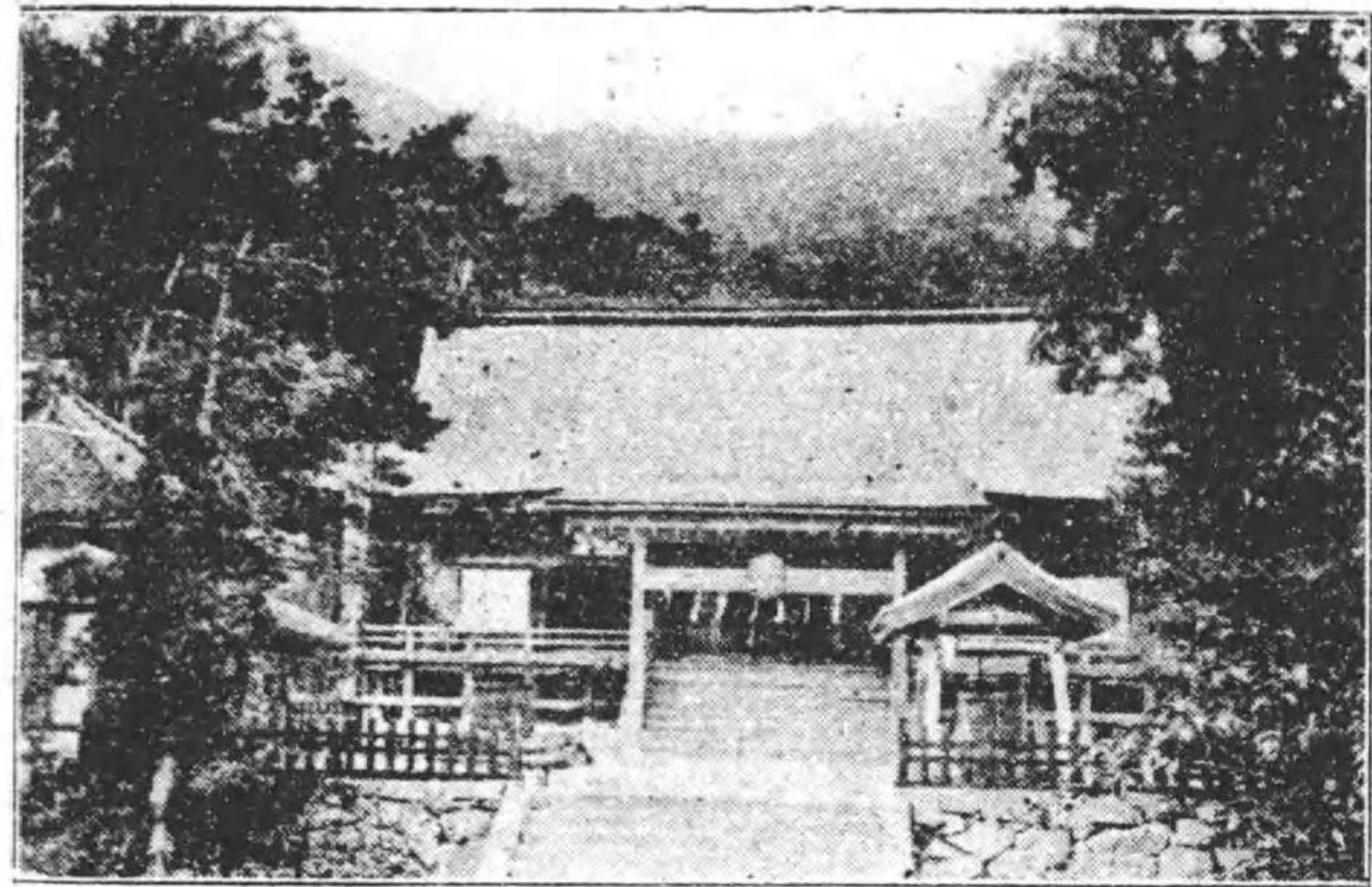
▲筑波鐵道北條驛より十三町。町は筑波郡の大邑である。古くは、多氣と云はれた。

城址は、北條町の北にある獨基の一丘にある。(北頂百三十米) 西麓を筑波川が流れてゐる。常陸大掾平良望の孫、維幹の築く所で、七世義幹に至り、府中へ遷り、爾後小田氏の有となり北條城と云ふに至つた。

筑波神社

▲筑波驛より二十町筑波町にある。

神社から山頂迄約二十五町。登山は男體から女體に廻るをよしとする。往復三時間を要する。昨年末、ケーブルカーで、山頂へゆ



筑波山神社御拜殿

くこきが出来るやうになつた。山は、古來關東

屈指の名山で、風俗常陸歌に、

筑波嶺のこのものがのみに蔭はあれど

きみが御影にますかげはなし

筑波神社は、筑波町の上方にあり、標高二百八十米突許りの小坦地にある。山神の靈を祀る。延喜式に「筑波郡筑波山神二座、一名神大一小とある。名神大は、即男神である。後人男女兩神に附合して、祭神を伊弉諾伊弉冊と説くは妄説である。維新後神佛混淆を禁んぜらるゝ迄は、別當知足院の僧侶が神領田五百石を有して専ら奉仕してゐた。知足院は、光隆僧正の時

五代將軍の寵任をえて、時めいた。神寶頗る多い。
山神の本地佛は、中尊寺に安置せられてあつた。

天目山傳正寺

▲筑波鐵道眞壁驛より十二町。

文安五年眞壁平四郎(法身國師)の創建である。曹洞宗屈指の古刹である。境内に淺野長政夫妻及び長重公の墓がある。寺の近くに傳正寺温泉がある。明治廿四年の開始で、レウマステチ、胃病に特效がある。

法身は眞壁の人、通稱を平四郎と云ふ、初め書を學ばず一個の野人に過ぎざりしも、中年出家して佛門に歸するに及び漸次に文字を解し、後、宋の禪學の盛なるを慕ひ、奮然渡航して臨安の天目山に登り、無準禪師に參禪して頓悟發明する所あり、歸朝後奥州松島の仙境に瑞巖寺を創設し、後北條時頼の招請に依り鎌倉に抵りしも幾干ならずして歸國し、

傳正寺を經營して此に住し文永十年入寂せり」と(筑波山誌)

加波山

▲眞壁驛から加波山へ一里。又足尾山へ一里。

加波山は、筑波の連嶺で、海拔二千五百四十一尺。山上の三枝神社は、日本武尊の創始と云はれ、盛夏の候には、遠近の信徒が加波山禪定を試みる。

明治十七年に、自由黨の富松正安、河野廣體ら此山により政府改造を名として兵を起したことがある。けれ共、革命の擧は成功しなかつた。革命の激文を左に。

抑建國の要は衆庶平等の理を明かにし、各自天與の福利を均しく享くるにあり、而して政府を置くの趣旨は、人民天賦の自由と幸福とを扞護するにあり、決して苛法を設け壓逆を施すべきものにあらざるなり、然而今日吾國の形勢を觀察すれば外は條約未だ改らず、内は國會未だ開けず爲めに奸臣政柄を弄し、上、聖天子を蔑如し、下人民に對し、收斂時なく、餓孝道に横

はるも之を檢するを知らず、其の慘狀荷くも志士仁人たるもの豈之を默止するに忍びんや
夫れ大風の傾けるは、一木の能く支ふる所にあらずと雖、奈何ぞ坐して其の倒るゝを見るに
忍びんや、故に我々茲に革命の軍を、茨城縣眞壁郡加波山上に擧げ、以て自由の公敵たる專制
政府を覆顛し、而して完全なる自由立憲政體を造出せんと欲す、嗚呼三千七百萬の同胞よ、我
黨と志を同ふし、俱に大義に應ずるは豈正に志士仁人の本分にあらずや、茲に機を飛ばして天
下兄弟に告ぐと云爾。

明治十七年九月廿三日

茨城縣	富松	正安	玉木	嘉一	保多	駒吉
福島縣	駒浦	吉副	三浦	文治	五十川	元吉
	山日守	太郎	天野市	太郎	琴田	岩松
	草野佐	久馬	原利	八河	野廣	體
	横山	信六	小針	重雄		
栃木縣	平尾	八十吉				

愛知縣 小林篤太郎

参考 謠曲櫻川に「磯部寺の住僧云々」とある磯部寺は、磯部町の神宮寺である。

浮島

▲土浦より船にてゆく。

浮島は、霞ヶ浦の中にある一島で、謠曲櫻川に「しだの浮島のうかめく云々」とある
ものである。稻敷郡阿波崎から渡航六町。(長七十町)古より信太の浮島とて有名である。
風土記に「信太郡、大足日子天皇、幸浮島之帳之宮無水供御云々」と見えてゐる。

潮來

▲土浦より汽船にてゆく。

北利根川の北岸で、丘陵により、風光愛すべきものがある。木曾路圖繪に「板久湊は、

景色最珍かにして加藤洲(十六島)の十二の橋と云ふあり。家は河中に作り出て男は船に乗り川の向の出島に至り農を勤む。小き所なれどこの邊の都會地と云ひ、をかしき遊女もあり」と。近世、遊女屋ありて、古の津の國の江口、神崎に比するものがあつた。潮來節は南郭先生が音律にかなふと、嘆稱したものである。

遊女町は、出入の船の碇泊地なれば發達したものである。この地で一見すべきは、古刹長勝寺である。海雲山と號し、鎌倉時代建始の禪苑である。利根川圖志曰ふ「馬場の兩かは松の並木山門に十六羅漢を安置す。佛殿は南向十間四面、鎌倉右大將殿の建立なり。堂のかたはらに臥龍松前に文治梅あり」と。元徳庚午の年に鑄た古鐘がある。

和名抄に「行方郡板來郡」とあり風土記に「從香澄里、往南十里、板來村、近臨海濱、置驛家とあり、下總香取神宮から、鹿島神宮へ巡拜の水路であつたのである。それに依つて古來交通上要衢であつたことがわかる。

鹿島神宮

▲(一)土浦より大船津迄汽船にてゆく。(二)成田鐵道佐原驛にて下車夫れより大船津迄汽船にてゆく。(三)銚子より大船津迄汽船でゆく。

大船津より、神宮迄十八町。神宮の門前を宮中と云ひ、旅舎數軒ある。宮中とは神村の境内の義である。

祭神は、武甕槌神で香取の祭神經津主命と並稱せらるゝ武勇の神である。古語に、豊香島宮或は天之大神社と云ひ、崇神帝の時、大倭國大坂山にあらはれ給ひ、中臣氏が奉齋して此地に祭つたのである。古來鹿島は常陸國の一ノ宮として、藤原氏の全盛時代には、奈良春日神社に祀り、氏神として尊崇せられてゐた。社境は御笠山と云ひ、老樹鬱々として其中に宮居が建つてゐる。今の社殿は元和年間徳川秀忠の造營である。

別當は神宮寺であつた。奥宮から後の方一町ばかりに、鹿島七不思議の一である要石がある。此下に大魚がゐて、其頭をくさびした爲めに鹿島地方には大地震がないと云ふ面白い傳説がある。本宮から東四町に、御手洗の池がある。大人でも子供でも、其水に入ると乳から上を越すことがないと云ふので、これ又七不思議の一に數へられてゐる。大宮司が館のありし附近は櫻山と云はれてゐる。

神宮の森を出て、鹿島灘へゆく途中に、高天原がある。沙丘三十五米以上の高平をなし(所々窪地あり)神聖なる靈地である。有名な末無川がある。

通例鹿島詣でをする人は、高天原をへて鹿島灘迄ゆかないが、夫れは誤りであつて、私は、是非とも鹿島灘(高天原)迄ゆかれんことを望む。

我が頼む鹿島の宮の瑞垣の

久しくなりぬ世々の契は

光明峰寺入道

大船津から四町ばかりの所に根本寺と云ふ名刹がある。禪宗臨濟派で、推古帝の朝聖徳

太子勅を奉じて草創せし所と云ひ傳へてをる。寺の傍に鎌足神社があり藤原鎌足の館と云ひつたへてゐるが、妄説である。

息 栖 明 神

▲浪逆浦の東岸にあり、鹿島宮仲へ二里半。

詳しくは於岐都説神社と云ひ、鹿島の攝社である。木曾路圖繪云ふ、「息栖明神は、祭神氣吹戸主命にて、拜殿、本地堂、八大龍王社等あり」と。古へは參詣の人も多かつたが、今では、衰へてゐる。

華表の兩側、水中深くに、男瓶、女瓶の奇石がある。男瓶徑一丈銚子の形を成し、女瓶徑三尺形土器に似たりと云はれてゐる。此石満潮には二三尺沈み、干潟には水にあらはれ、銚子の中は素水で、潮の味ひがないと云はれてゐる。これを土地の人は忍鹽井と呼んでゐる。

神野池(輕野池業ノ池)の絶景をさぐるも面白い。
古名寒田沼

常陸國分寺

▲石岡驛下車。

石岡町は、戀瀬川を南に帶び、岡野の上にある。舊名府中と云ひ當國の國府の所在地であつた。城址は、古へ常陸大掾氏の居城であつた。(建保)國府址は今詳かでないが蓋し、城址に求むべきであらふ。大掾氏の廟寺たる平福寺がある。地方屈指の古刹である。

國分寺は、性質上、府中(府)の附近にあるを常とする。常陸國分寺は、石岡町(中府)の北府中平にある。これ古への僧寺であつて尼寺の跡は、不詳である。尼寺址は、僧寺の西北三町の野中に尋ねべしと云はれてゐる。(俗に尼寺ヶ)郡郷考に「天正十八年佐竹の兵、大椽清幹を亡ぼせし時の放火に寺も灰燼せるを後に、再營すと云へり」と。

閑居山

▲石岡町の西一里。

志筑村大字上志筑にある。筑波山脈の一支峰で老松山を蔽ひ、古櫻其間に枝を交へて、花時の風光は絶美である。古來歌枕として有名である。

中志筑に、城址がある。志筑八千石とて、本堂氏の封邑であつた。

水戸の史蹟

▲水戸驛下車。

水戸は、茨城縣下第一の都會で、御三家の一たる、徳川家の城邑たりし地である。那珂川を控へ、南は千波沼にのぞみ、形勝の地である。全市は大別して上市、下市の二つに分れてゐる。

(1) 水戸城址 驛より五町。

上市下市の中央にある。長阜に依りて築城し要害堅固である。中世常陸大椽家の建てたもので、頼朝勃興の時は、此に服して當國を略して、權勢を振舞つた。應永年間に至り、江戸氏が大椽家にかはつてこゝに居城した。天正文祿の頃に至り佐竹氏は江戸氏から此城を奪つて、居城とした。後佐竹氏が秋田に移され(關ヶ原役に)て以來、家康は六子信吉を封じ信吉早世したので、弟の頼宣を封じた頼宣駿河に轉ずるに及び、頼房この地に封ぜられ、以て光國以下歴代城主として、居城した。城は今日廢れ果てたが、猶城壘、石壘、渠濠が存して昔を物語つてゐる。本丸には、中學校がある。三ノ丸には弘道館址と、縣廳とがある。

(2) 弘道館 驛より五町。

天保九年三月、徳川齋昭が、光圀の遺志をついで創立した所で、同十二年八月に完成した藩士に文武の學を講ぜしめた遺蹟である。水戸學派は、當時日本の學界を風靡した。

(3) 常磐神社と彰考館、驛の西二十町。

共に常磐公園の中にある。公園は偕樂園又は後樂園として知られ、日本三公園の一で元は藩主遊息の地であつたが、天保十年に、水戸烈公が之を拓き好文亭を園内に設けたのである。こゝは景色のよい所で、亭によつて下瞰すれば、千波沼が手にとるやうに見える。園内に梅樹多く、水戸の梅の名は天下に鳴りひびいてゐる。

常磐神社は、公園の東隅にある。義公(光)烈公(昭)を合祀し、明治十五年別格官幣社に列せられた。神社の南屋下に、彰考館がある。かの光圀に依つて始められた大日本史の編纂所であつたのである。郊外の史蹟云ふ。

明暦三年光圀は扨めて史局を江戸駒込の下屋敷に設け、次で寛文十二年の春これを小石川の藩邸に移し、名を彰考館と號した。後元祿十一年にこれを水戸に移した。當時光圀致仕して西山莊にゐたからである。光圀の墓後彰考館は江戸と水戸と二個所に在つた

譯である。後文政十二年江戸の彰考館を閉ぢた。これ兩所の彰考館の意見は紛糾して時々纏め難かつたからである。明治維新の後もその修史事業は繼續してゐた。明治三十九年に至つて、大日本史は志類に至るまで全部の編輯上本成り、この館も閉鎖することゝなつた。今日はたゞ圖書を藏してゐるに過ぎない。

義公の隠棲地

▲水戸驛から水戸鐵道に乗りかへ、太田驛下車。義公の隠棲地西山
莊は驛から三十町。

太田町は久慈郡の郡邑である。佐竹昌義が延文の頃築いた城の址もある。又法然寺、淨光寺、蓮華寺等の古刹もある。

西山莊は、公の墓後寺となし惠日庵と稱したが、文化年間に、火事で焼けてしまつた。夫れを天保年間に烈公が古に模して再建したのが今に残つてゐる。

附近に、久昌寺と云ふ日蓮宗の古刹がある。元祿年間光圀公の創建で、開山は、僧日忠である。

太田驛の北一里に瑞龍山がある。水戸家累代墳塋の地である。水戸家の葬儀は世々儒禮を用ゐた。かの明の碩儒朱舜水の墓もこゝにある。太田町の北三里に玉簾の瀧と云ふ名勝がある。四度の瀧、生瀬の瀧と共に常陸の名勝である。

磯前神社

▲那珂湊驛の西方廿五町。

水戸人士にとつては、「浪の花咲く」大洗附近、磯濱、湊、平磯の三濱廻りは、一日の行樂地として絶好の場所である。

磯前神社は、大己貴命を祀つた社で、大洗崎の岡に鎮座し、國幣中社に列してゐる、大洋に面して日の出が非常によい。此社は延喜式に鹿島郡大洗磯前薬師菩薩神社と載せ大明

神と注せられてゐる。

大洗の岡は、遙かに銚子犬吠岬に相對してゐる。吉田博士云ふ「大洗より犬吠に至る、沙濱二十里、一線微かに鉤状をなし、其海面を鹿島灘と呼ぶ云々」と。

酒列磯前神社

▲浜鐵道那珂湊驛より一里半。又水戸より平磯迄自動車賃一圓。

平磯町の北、磯崎にある。祭神は少彦名の命で、大洗、酒列と並稱せられてゐる。本社
の祭神は、大洗の祭神と共に國土の經營に努力したのである。大洗と共に漁家の崇敬頗る
厚い。風光雄大、一度は、參詣のために杖を曳くべきである。

大宮甲明神

▲水戸鐵道常陸大宮驛下車。

大宮町は、那珂郡、山道の一荒驛である。舊名を部垂と云ふ。へ
タレミは垂れ降れる形狀に名づけ、水濱海岸の縁端之を云ふ。古
へ佐竹氏の居た所である。

大宮を起點として久慈川の溪谷に沿うて北に向ふ線を大郡線と云
ひ、この沿線に袋田の瀧(四度)の瀧がある。

大宮甲明神は、邊垂神社とも云ひ、古祠である。新志補云ふ、「鹿島久壽神領目錄に、邊
垂とあり、古城址あり。相傳ふ、天文中、佐竹四郎義元こゝにをり、子孫つひに部垂氏と
なる。天保中大宮村と改む。鹿島明神あり、又部垂大宮、又甲宮と云ふ云々」と。

東金砂山

久慈郡の中央に、東金砂(千五百三)西金砂(千八)と云ふ二名山がある。共に山頂に一小祠
がある。祭神は詳かでないが、土人の傳ふる所によれば、東金砂山に鎮する者を男神、西

金砂に鎮するものを女神にょじんと稱してゐる。東金砂は満山樹木蒼鬱じゆもんさううつとして能く雷雨を起すので古へから「金砂の雷は一國の雨」と稱ふるに至つた。金砂神の祭禮さいれいには、田樂の舞を行ふを以て有名である。大祭は七十三年目毎、小祭は七年毎に行つてゐる。田樂については、拙著能樂全史を参照せられたい。

大甕神社

▲大甕驛下車。この附近に海水浴場が多い。

社は、怪岩相重れる數丈の上に鎮座し、鐵鎖てつさに依つて、頂上に登るのである。社前しゃぜんからの風光は雄大である。又、驛えきより六町に泉が森あり、泉川の水源すゐげん辨天べんてん祠の傍に湧出してゐる。式内泉神社の祭神を天速玉姬命と稱してゐる。天速玉とは、泉井の羊稱ひしやうに他ならぬ。この地を

「都みやこいでて今日けふみかの原泉川」

に附合するは、大きな誤りあやまである。みかの原泉川の古歌は山城である。常陸ひたちではない。

日立鑛山

▲助川驛すけがはえきの西北一里半。専用の軌道きだうがある。

助川は有名な海水浴場である。

天保六年水戸藩は、海防の爲め助川に寨を起した。助川東の海岸かいがんを會瀬の浦と云ひ、當國屈指の歌枕である。

日立鑛山は、現在海内屈指の鑛山で、鑛山事務所、製練所等がある。採鑛所さいくわうじよ迄は、事務所から一里ある、鑛區八百七十七萬四千坪、三千の人間が、この鑛山で生活してゐる。金銀銅を併せて一ヶ年七八百萬圓の生産額に達してゐる。

驛の西北二十町に、日立製作所がある。規模頗る宏大である。

關 本

▲關本驛下車。

風光明媚の磯原驛の次ぎは、關本驛である。(磯原驛に天妃山がある。天妃山は海岸にある一小島である。古來神廟ありしにや權現山とも云うてゐる。元祿中明僧所齊の天妃像を祭り天妃山と命名した)。

勿來關(岩城)へ通ずる驛路で、關本の名は之れより起つたのである。勿來關(本名菊)は關本の北にある。鐵道では次驛勿來で下車すれば關址迄約二十町である。

大 津

▲關本驛から十三町。

漁業繁盛の地で、鯉節、乾鮑などを製出してゐる。夏季は、海水浴場として賑はつてゐる。町としてみるべきは、波濤岩に激して奇聲をなすと傳ふる鐘鼓洞の奇勝、眺望絶佳の宇佐姿山である。宇佐姿山は一名唐歸山と云ひ、山上は老杉林をなし、航海舟夫の目標となつてゐる。

水戸藩の時、この地に砲臺を設けて海防を嚴にしたことがあつた。文化七年五月に、英國の汽船が二隻入港したことがあつた。船中病者あり藥餌を求めんが爲めに寄港したのであると云はれてゐる。この時、水戸藩士は、銃を携へて上陸した水兵を捕縛したが、他意なきを知つて之を許して歸船させた。

黒崎某の常陸紀行に、「常陸國は上古海水逆流して常なかりしが、後來漸次潮退き、人民常に陸地を得て居に安んじける故に常陸國といふ、と言ひけん如く、地形陷降隆起の最も著しき證跡を残したるに似たり、即ち霞ヶ浦附近の一面海なりしもの、俄かに隆起して高所は山嶽、低所は田野、更に低き所は湖沼と化し、また、多賀郡附近の往昔海に漸せし街道の今は海岸を距ること數町餘に及びたる、皆土地昇降の結果に因らずんばあらず。現

に風土紀に、國寄河原宿福黒磨時大海之邊石壁彫造觀世音菩薩像今存矣因號佛濱と記されたるその觀音の像の、今神岡村の南隅陸前濱街道より二町の西にありて、扁平なる岩石にその影像を見る、以て證とすべし。また源義家の東征したる道路も佛濱より西に距ること數町、當時海岸にありし勿來關址も現時の官道を距ること七八町の丘阜にあり。而して官道西側の斷崖五六丈の所には、波濤の浸蝕せし跡、歴々として辯すべし。今、これを歴史上年月より想定し、九百年間地變力は終始一様の隆起を爲せりと斷ずれば、現今佛濱の位置の海面上十八尺なるより推して百年間二尺、十年間二寸、一年間二分の隆起を爲せることを知るべし。また現今濱街道磯原の海岸に聳ゆる天妃山の如きも、義家東征の頃には蕞爾たる一島嶼なりしと言へば、その東方海上に點在せる二つの島の如きも 數百年ならずして、蜿蜒たる一半島を成すやも知るべからず。」

平 潟

▲關本驛下車。平潟海岸勿來巡りの順路は、

- (1) 關本驛より大津海水浴場へ十七町。
 - (2) 大津の北八町に五浦の勝がある。こゝから平潟迄二十町。
 - (3) 平潟から勿來の關迄二十七町。
 - (4) 勿來關址から勿來驛迄二十町。
- 一日行程としては、丁度誂へ向きである。

多賀郡の北隅で、常陸磐城兩國の國境に接してゐる。古來有名な港灣で、鷹取鼻、初島山鼻の二岬に依つて圍まれた小港である。

幕府時代には、江戸と奥羽とを往復する船舶は必らずこの港に寄港するを例としたので昔時は紅樓相連つてゐたが、今は昔の面影がない。風光は、昔と今もかはりはなく、明媚

の地である。

明治元年幕府瓦解の時、上野輪王寺宮が、海路奥羽へのがれさせ給ひし時には、この地に御上陸なされたのである。明治戊辰の役に際しては、仙臺藩、相馬藩、岩城藩が兵を出して此の地を守つた。官軍汽船に乗つて平潟に上陸し、一大激戦が行はれたが、官軍が終ひに快勝した。

和光院の記録に「永祿五年六月、唐船一艘、常州平方濱に着、九月歸る」と見えてをる。蓋し漂着したものであらふ。田山花袋氏云ふ。

助川の海水浴も矢張松原の中にある。停車場から二三町しかない。この附近の高萩の町は、通りに柳などが植ゑてあつて、感じの好いところだ。

川尻は好いところだ。丁度高萩の手前二里ばかりのところにあるが、濱街道を行くこゝ石無^い以北第一の海で、向うに徒崖が長く海中に突出してゐて、人家はすぐに海に面して連つてゐる。夕暮の漁市のさまなどはそとりに詩思を催さしめるに足りる。矢張其處にも海水浴場があ

る。

高萩から北では、磯原がある。そこに、天如山といふ一寸江の島に似た島があつて、辨財天^{べんざいてん}が祀つてある。水戸の烈公などよく遊びに來たところである。漁村の錯落として連つてゐるさまも好い。

この少し先に、二つ岩といふのがある。海中に竝んで立つてゐる奇岩である。一つは大きく一つは小さく、小さい方は年々海水に浸蝕されて次第に小さくなつて行くといふことである。私はそこを通る時、かういふ唄を詠んだ。『夫婦岩一つは波にうばはれて残る一つのかげのさびしさ』小さい方のなくなつて了つた時を想像して詠んで見たのである。

こゝから例の美術院の畫家達の別荘のある五浦はさう離れない。概して此處等は徒崖の中に沙灘を交へたやうなところで、到るところ海が見えた。こゝろとして旅の興を誘はぬところは、ない。

それから猶少し行くこゝ、大津の海水浴場がある。丁度、平潟と背中合になつてゐるやうなところで、海は磯原川尻に比べて、やゝひらけすぎてゐるが、平潟に近いので、物資が多く、何

かにつけて便利だ。

平潟は昔は和船の港である。海水少しく灣入して、左に徒崖の海中に突出してゐるのを見る。昔は榮えたであらうと思はれるやうな位置にある。人家は海に面してゐて、旅舎の二階からその港を一日に見下ろすことが出来るやうになつてゐる。古い遊廓などがあつて、汚ない女郎が大勢ゐる。今でも船頭達を相手にしてゐるもの見える。

昔は和船は銚子から磯濱、磯濱から此處へこ来て、それから相馬の請戸港へこ入つて、そして、遠く荒海をこえて、陸前の石の巻港へこ入つて行つたのである。従つてこの小さい港は全く船と帆とで埋められるやうな光景を呈したといふことである。今は、矢張海水浴場がある。大津などよりも昔の衰頹の氣分を味ふことが出来るだけ、それだけ面白いと私は思ふ。トンネルを越すと、もう磐城國だ。

總武線

龜戸町

錦糸町驛から天神迄東約七町。市内電車江東橋終點よりもゆける。

龜戸は、最近著しく發展して、郊外と云ふ氣分は失せてしまつた。今では、純然たる都會地である。

龜戸と云ふ地名については、二つの説がある。

(一) 龜ヶ井と云ふ舊井(今臥龍梅邸)によりて、此名起れりとの説。

(二) 古へ此の地は、形狀龜に似たる龜ヶ島と云ふ一足島なりしが故にとの説。

何れも俗信たるを免れない、こゝには有名な龜戸天神がある。天神の東北三町餘に、梅屋敷がある。臥龍梅、又は代繼梅とて享保の頃から、天下の名木なりとて俳人歌人から賞

められるに至つた。臥龍梅と名づけしは水戸光圀公、代繼の梅と名づけたのは、八代將軍吉宗公であつた。

梅屋敷から北二丁餘にして、日本武尊の故事を傳ふる吾妻權現がある。又天神の南二町許の所に、武江年表に「寛文三年より天和三年に至りて、龜戸村に錢を鑄せしめらる」とある錢座跡がある。(又驛より十三町、日蓮宗法性寺境内に、) 妙見堂があり俗信の的となつてゐる。

龜井戸天神

龜井戸町天神橋の東北にある。近世江戸の人々の崇敬頗る厚かつた所である。今では、神聖なる境内の附近は、俗化して、弦歌の巷となつてしまつた。

郊外史蹟云ふ、今から二百六十年前家光將軍の正保九年に、九州太宰府の別當大島居信祐なる者が、平素天満宮を崇信せしに、或夜天神の靈夢に感じて、天神の愛せられし飛梅を以て神體を彫り適當な土地を得て社廟を建立せん志し、周く天下を巡遊せしに、神慮に適ふ地を

發見し得ずして終に江戸に來り此龜戸村にありし天満宮の小祀こそ適當なるものなりとて、此を修造して安置せり、此れ正保三年より十六年の後の寛文元年八月廿三日の事なり、然し此れは「元宮天神」にて現在の地より東方七町餘の地で、天神の舊地と號するさか、然るに此年四代家綱將軍の台命により、本所の地を埋立てて武家に分配せられしが、此時信祐埋立奉行徳山五兵衛、山崎四郎左衛門に天神の由來を談ぜしに、翌二年二月十九日、時の老中松平伊豆守信綱より、此社は新埋立地の鬼門に當り居れば、幸ひ此地の鎮守の神とすべしとの命ありて現今の社地を賜ひ、翌三年神殿以下悉く太宰府にまねて造られ、是から東宰府と稱せらるゝに至つたと云ふ事である、家綱自らも延寶五年に參詣された事もあり、享保五年には八代吉宗將軍も、御茶屋までも新築された事がある、加ふるに、朝廷の思召も深く、後水尾法皇まりは管神尊號の宸筆を賜はりし事もあり、又元祿十二年には靈元上皇から菅公八百年忌に關する御製を賜はりし事などありて、上下一般の崇信厚く、従つて繁榮に赴きしに、延享二年二月五日(二六一年前)火災の爲め丸燒けとなりしを、間もなく本社樓門末社は再建せられしも、以前の如く壯觀を呈するには至らずして終つた。寶物には天國の銘ある太刀、菅公自畫と云ふ天神像

後水尾院、靈元院、正親町院の宸筆、菅公筆と云ふ法華經、高辻亞相菅原豐長卿の筆と云ふ古縁起三卷、其他澤山の書畫器物を藏して居るこの事だが何れも眉に唾して見ればならない。末社も澤山あるが、中にも花園明神と云ふのは、菅公の妃を祀る所、野見靈神社は菅公の祖野見宿禰を祀る所、祖師靈社は信祐を祀る所である。祭禮は凡て太宰府にまねたもので、一月の初卯の日には藪玉を賣り、開運、火防雷際かいらんの御札が出る、同月廿五日には鶯替の神事があり、節分の日には追儼の神事ありて成田に次ぐ盛んなものである。

江東めぐり

龜井戸天神から、木下川薬師（木下川梅園）淨光寺と見物して、墨堤へ出るのは、懐古の情味ゆたかな行遊である。

向島（墨堤）でみるべきは、謡曲隅田川で、有名な梅若山王社（天台宗木母寺の堂前にある）と三圍稻荷で

あらふ。元祿六年日どりつゞきの時伴人の其角が、「夕立や田を三圍の神ならば」なる一句を詠じたら、稻荷の明神これに感鳴して、忽ち、沛然たる雨を降らしたと云はれる奇しき物語がある。

又、暇あらば、向島の七福神めぐりをするも面白からふ。

「三圍稻荷社中の惠比須大黒祠、

「長命寺の辨天」此像は傳教大師一刀三禮の名作と言ひ傳へられて居るものだ。此寺は天台宗で、江戸時代時々將軍遊獵の際の中食所となり、又家光の病氣の時常寺内の磐者水を服して全治し長命寺の寺號を賜はつたと言ひ傳へ居る。次は須崎町の

「弘福寺の布袋」次は

「百花園」百花園の座敷に据へてある福祿壽である、此百花園は文化の頃北野屋菊塙なる風流人が、四季の花卉を培養して、當時の村田春海、太田蜀山人、龜田鵬翁、加藤千陰などの學者詩人等と交遊して、此等の風流人遊び場所となつて居る。従てお茶きこしめ

せ梅干も候ぞ」と云ふ調子で、營業的趣味はない清い遊び場であつた。近年洪水で古木次第に枯れ園の維持も中々困難との事で多少衰頹の傾がある、然し猶四季向島に遊ぶ者の足を入れる所だ、園内には樂焼もある、次は

〔白髯神社〕の壽老人である、此は別に壽老人が奉祠してあるのではないが、白髯の名から壽老人と數へたものだ、此神社は近江滋賀郡の白髯社の分社で、猿田彦命、天照大神、豊受大神を奉祀してある。次は白髯から十町餘ある。

〔多聞寺の毘沙門天〕である、此寺の本尊は弘法の作との傳へである。

小岩の番所

▲小岩驛下車、十五町。

舊幕の頃には、小岩と市川に番所をおいて、江戸東方の關門としてゐた。今の交番から街道にかけての地が、その舊地で御番所町と云ふてゐる。昔はこゝに二ヶ所の木戸門があ

り四人の番士がゐて旅人を改めた。

又驛より、十六町ばかりの所に、善養寺と云ふ古刹がある。その境内に星下りの松がある。武州屈指の名木である。

市川の名勝

▲總武線市川驛下車。▲京成電車市川驛下車。

市川町は、古へ下總國府の所在地(國府廳は、總寧寺境内にあつた)で、古來東國の要地であつた。市川とはもと江津の名であつて、市川の渡とは、江戸川(古名太井川)の渡である。今の市川町は天正後の新驛で、舊幕の頃には、街道往來の人士で賑はつた。蓋し、江頭對岸(小)に關柵をおき往來を誰何したるが故である。

(1) 眞間の入江、市川宿の北、眞間川の岸が古への眞間の里で、(眞間とは、高畦盡頭の地を云ふ)眞間の海(眞間入江)はこゝに入り込んでゐたのである。こゝの入江は、萬葉集以來の

歌枕であるが、今は邸宅地と化してしまつた。萬葉集下總國歌に見ゆる繼橋は、弘法寺門前、眞間川に架せられたる小橋なりと云はれてゐる。

足の音もせず行かむ駒もがな

可都志賀の麻末の都蔭波志やますかよはん

(萬葉下總國歌)

(2) 手兒奈社、此社は、手兒奈と云ふ傳説中の女主人を祀つたものだ。今では婦人安産の神として俗信的的となつてゐる。此傳説は、非常に古いもので、奈良朝の歌集萬葉集の中に此にちなんだ歌が數首もある、此あたりに一人の、み目うるはしき田舎姫が住んで居た、其名は手兒奈と云ふた。手織の木綿着物、手ざはりあらし麻の衣を身にまとへど、錦・綾に身を包む京の美人も、到底其に及ばない。そこで言ひよる風流男は、江戸川の入り船の數よりも繁しと云ふ有様であつたが、手兒奈は何れになびかんやらと思案にあまつて、遂に身を眞間の入江に投じて了つたと云ふ口

マンチツクな傳説である。(安藤氏所説)

(3) 弘法寺、繼橋をわたると、前に高い石段がある。石段の上の丘は、眞間の山で、(二十米)東北は、尊朶山を隔て、國分山に對してゐる。維新の時、官軍と賊軍と戦つた地である。

弘法寺は、日蓮宗池上本門寺の末寺で、寺領三十石。(元は密宗にして空海の法)本尊は釋迦如來(開基富城常忍)樓門の金剛力士は運慶の作である。

(4) 六所神社、弘法寺の北、國府六所官と稱せられ、當國の惣社であつた。今僅かに遺址を傳ふるのみ(一小祠)

(5) 國府臺、眞間山つゞきの丘で、總寧寺附近を指して特に國府臺と云ふてゐる。地名の起りについてはいろいろの説があるけれども、「國府のありし臺なれば」と云ふのが最もよい説である。こゝに國府址、市川城址、總寧寺がある。

こゝは里見北條二氏が二度にわたつて戦つた地で、里見氏二ヶ度の敗戦には、悲

しきローマンスがある。

「古戦場云ふ」國府臺は總武鐵道の市川驛の北方にして、利根川の流（當時利根川は霞浦の方へは落ちず市川へ注ぐ）に傍ひ、總寧寺の邊に至る高臺の總稱にして、古へ戦争のありし地は總寧寺の境内なり、然れども現今過半は教導團の敷地となり寺も亦境内大に狭小となれり、天守臺の趾には富士淺間の小祠を祀る、石櫛二つあり、一は里見弘次の墓にして、一は正木内膳の墓と稱すれど、元より信じ難し、其側に三四の石棺土中より現はれ居るもの、是れ里見家落城の時寶物を納めし處と云ひ、其後水戸黄門之を發掘し、寶物は幕府に獻せしとぞ、然れども其物を見ざれば其時代を定むること能はず、墓の南方險崖深淵に臨む處に一老松あり、鐘懸の松と呼ぶ、里見氏大鐘を此松にかけて、合圖に供せしより其名起ると云。

總寧寺晚眺

荒城千仞没 蕭寺上方開 山斷江帆出 路廻郊樹來
磬鐘餘鹿野 野代古鴻臺 落白斯時恨 臨風起客哀

服部南郭

(6) 總寧寺、寺は、近世曹洞宗惣録三寺の一に數へられ、武州越生龍穩寺、野州富田大中寺と併稱せられた。始め江州馬場村にあつたのを、天正三年北條氏政が、關宿の城下に移轉した。然るにその地は洪水の恐れがあるので、天正三年今の地に移轉さしたのである。

維新となつて、幕府の保護を失ひ、荒廢した。

(7) 金光明寺、弘法寺の東北八町にある。今は見る影もない一寒寺であるが、此れが聖武天皇の時に作られた下總國分寺の址である。（今眞言宗）今も猶附近から布目瓦が出る。

桃花の頃、國府臺から、中山の桃林へ出て、八幡の藪不知の森（水戸黄門こゝに入りて、異である。古代）を見、法華經寺へ出るは一興である。

法華經寺

▲中山驛の北五町

日蓮宗の大本山で、身延池上など、併稱せられる大坊である。近世寺領五十石であつた。寺傳に曰く、「建長六年、日蓮上人總州に遊び將さに鎌倉に還へらんとす。時に中山村の住人富木常忍また同地に赴かんと欲し、たま／＼船を同うして上人の所説を聞き、大にこれに服す。文應元年終に宅地を捨て、一字を建立し、上人を聘してこれに居らしむ。上人こゝに於て百日間の説法を試み、また自ら一尊四菩薩の像を刻して堂に安じ、これを法華堂と名く。これ即ち今の奥の院にして當院の草創なりと。寺域一萬四千七十七坪、本堂を中心として經藏、骨堂、五重塔、鼓樓、常唱堂等相連り、堂の背後小丘の上には鬼子母神堂、祖師説法堂、祈禱堂等あり。右方階壁の中には客殿、方丈等あり。奥の院は構外右方の小路を東北に距る三町許の處に位し、開基常忍(日常上人)の墓また路を隔て、その左方草

堂の中にあり。右の内祖師説法堂は祖師が彫刻したる一尊四菩薩の像を安ずる所にして、世俗飛驒匠が造營に係ると稱す。その他境内に於て著名なるは常唱堂の背後に鬱茂せる泣銀杏にして、これ古へ眞間弘法寺の開山日頂上人その父常忍の怒に觸れ對顔を許されざること數年、日頂屢々當寺に來り對顔を請ふと雖も得ず、常にこの樹下に慟哭して去れり。故に今に及んでその名を存すと傳ふ。寺の北方二十町字千寺に妙正寺ヶ池がある。一遊また一興である。

意富比神社

▲船橋驛より六町。

俗に舟橋大神宮と云はれてゐる。天照皇大神、豊受大神を祀り、尙八幡、春日の三祠を合祀してをる。境内小丘の上にある、風光絶佳。燈明臺がある。古傳に景行天皇の時、日本武尊東夷征討此地に來り伊勢大神宮を祈願す、偶々海に小舟あり、從者をして之れを看せ

しむるに舟中神及古鏡一面を置く、尊把つて大神宮の神勅とし大に喜び乃ち此處に祭る。天皇狀を得て皇子五百城入彦尊を神官とし、東國の八十八ヶ村の鎮守たらしむ、貞觀十三年關東一の宮の號を贈る、後源頼義家奥羽征討の時、途次本殿を修理し仁平元年源義朝勅を奉じて社殿を再建す、後幾度か頽廢し、徳川家康に到つて伊奈備前守奉行として再建す、毎年九月大祭を施行す、其式古式にして頗る伊勢大廟に類す或は伊勢大神宮を朝日宮と云ひ、當所を夕日の宮と云ふ、神寶は日蓮上人奉納の劍、豊前宇佐八幡の神官なる神息の名劍古鏡等ありと。

本社ほんしやの東六町許り淺間山の丘上に、木花開耶姬を祀る茂古神社がある。

千葉の名勝

▲千葉驛下車。

千葉は、兩總の中間に當り、海陸の交通を扼し、田野亦良く開け、肥美の邑里である。

中世千葉氏全盛の頃は、城下町として繁盛したが、天正年間その滅落後衰微したが、明治六年縣廳の所在地となつてから、再び殷盛の地となつた、千葉氏と關係の深い社や御寺が多。

(1) 千葉神社、舊妙見寺と云ひ、祭星の祠壇である。千葉氏の氏神である。明治七年火災にかゝり、今は哀れな神社である。(祭神は天御中主神、經津主神、日本武尊)

(2) 大日寺、千葉氏累代の菩提寺で、常兼以下胤將迄十六代の墳墓がある。「仁生法師奉勅、天平寶字元年開基」と云ふ説はとるに足らない。

(3) 來迎寺、建治の頃一遍上人に依つて開かれた時宗の寺であつたのを天正年間家康の命によつて、滿譽尊照大僧正が中興して淨土宗となしたのである。この地を道場と云ふは家康遊獵のみぎり、大僧正の説教に耳を傾けしによるとの説がある。

(4) 登渡神社、祭神は天御中主尊で、千葉定胤の創建で、千葉氏元服の守神と稱して、千葉氏一族から崇敬せられてゐた。

(5) 猪鼻臺、町の東南に横はる小丘で、千葉氏歴代の城址である。丘上からの風光は頗るよく。

(6) 君待橋、寒川の長洲にある。寒川には、式内の寒川神社がある。この橋については傳説がある。眞偽は、元よりつまびらかでない。

傳へ曰ふ、古へ藤原實方陸奥へ下向の途次、偶々此橋を過ぎて詠あり「寒川や袖思が浦にたつ煙君をまつ橋身にぞ知らるゝ」、又治承年間千葉介常胤源頼朝を此橋上に迎ふ、頼朝左右を顧みて橋名を問ひしに、常胤の末子東六郎太夫胤頼傍より坐を進め、輒ち咏じて云ふ、「見えかくれ八重の汐路の待橋を渡りもあへず歸る舟人」と是を以て世人今に至るまで其橋名を傳へり。

(7) 千葉寺、千葉氏の氏寺である。寺は、阪東三十三観音の一で、海上山観音院と號してゐる。寺域幽邃、櫻の名所である。相馬日記卷ノ四云ふ。

千葉観音城に戻鐘とて弘長元年十二月二十二日と銘せし巨鐘あり。中世鑄改みん

とて、江戸の鑄工が許へ遣はしけるに、自ら鳴りて千葉寺々々といふ音のしければ、恐れがりて、その儘戻鐘とは呼べりとなん、これ千葉笑ひとて年ごとの師走の晦日夜里人この寺に寄り集ひ、各々面おほひして地頭村長などの邪曲事より始め、人のよからぬ舉動どもあげつらひ、罵り合ふことありと云へり。こは人々の懈りを諫むるわざなれば筑波嶺の耀歌會などにはいと／＼勝れる風俗と謂ふべし。

佐倉城址

▲佐倉驛下車十町。今の市街は、慶長の末年城市を開いて以來のもので、元は鹿島郡鏑木の地である。町は高所にあるを以て、鐵路は丘陵下に敷設せられてゐる、炭及び蒟蒻が名物である。

城址は、町の西、鹿島臺にある。島狀の丘陵で、要害堅固である。慶長十五年に工を起して、元和に至りてなる。土井大炊頭利勝こゝにすむ。その後城主はしば／＼かはつたが、

延享三年以來堀田氏こゝに住し、明治四年に至つて、廢城となつた。(十一) 因みに、慶長八年以前の佐倉城は、本佐倉の根小屋にあつたのである。根小屋の古城址は、千葉氏の本城の遺址で、將門こゝに城をかまへたことがあるとも云ひつたへられてをる。今猶城址の北に將門の靈を祀つた一小祠がある。

鹿島臺の城址から、白井の方へ歩いてゆくも面白い。白井には白井氏の城址があり、臨濟派の圓應寺と云ふ古刹もある。白井から習志野原をへて津田沼迄歩くと丁度一日の遠足に誂へ向きである。

成田 不動

▲成田驛下車。寺前迄電車の便がある。

成田町は、不動さんに依つて發達した町である。不動さんが江戸市民の信仰する所となり、阪東の一名場となつたのは、元祿以後である。

成田の不動は、成田山明王院とも神護新勝寺とも云ひ、本尊の不動は弘法大師作で、山城高雄山神護の護摩堂に祀つてあつたものである、新撰名勝地誌謂ふ。

市街より、門を入れば、石段途を壘み石段高く、二王門に至る。路の兩側には旅舎簷を接し、婢等の出で、旅客を呼ぶ聲喧しく、通眼堂、新勝寺本坊、祖師堂、大師堂は路の左側に連り、阿彌陀堂、正福院はその右側に連る。二王門は天保年間の建築にして、成田山三字の額は前の東大寺別當道恕上人の筆なりといふ。左右に金剛力士の像安置せり。二王門を過ぎて更に石段を上げば、兩側に奉納の石燈籠及び石碑立連なり、磴を登り盡せしところに不動尊本堂あり。結構美を盡し、燈火は金器銀財に映じて燦然人の眼を射る。護摩の烟蠟燭の光、屏住絶ゆるの機なし。堂の廣さ十四間四方、建築は安政四年のことに係ると聞く。腰板の五百羅漢は松本良山の作、四方屏の二十四孝圖は島村俊表の作、軒先の龍は長谷川權頭の作、本尊裏面の十六羅漢狩野一信の筆なり。本堂の右方に鐘樓、寶塔、經藏、額堂、接待所があり。寶塔は高さ九丈、間口五間、周圍に十六羅漢の畫像あり。經藏の額

面は白川樂翁公の筆、額堂は七代目團十郎の寄進に係るといふ。更に本堂の背後に光明堂奥の院あり。光明堂の扁額は龜田鵬齋の筆と稱し、併に文晁筆猿樂走馬の圖あり、奥の院には大日如來を安置す。この他なほ境内に朝日觀音堂護摩本堂、聖德太子堂、望河閣、花屋敷、吉野櫻、大蘇鐵、パノラマ等あり。花屋敷には有名なる大南天を栽ゆ。境内の廣さすべて、三千六百六十五坪關東隨一の靈利たるに背かず。たゞ惜むらくは、境内俗氣紛々として或はあやしげなる石像、石標を建て、または泉石假山の奇を裝ふこと多きを。然れども、これ本山信仰の人の多く俳優、藝人、工匠の輩にして、高尚の風趣に心乏しきが故なるべし。寶物は數多きが中に、天國の御劍を以て第一に推す。これ、平將門調伏の砌り朱雀天皇の賜りしところなりと傳ふ。毎月二十八日を縁日となし、參詣人絡繹たるが中にも、一、五、九、三月の繁盛は物の比すべきなく、各旅店は講中の信徒を以て充滿し、疊一疊につき二三人を容るゝ程の熱鬧を極むといふ。寺の縁起の大意に曰く「そもく成田山新勝寺は、新義眞言宗に屬し、京師上嵯峨大覺寺御門跡末なり。開山を寛朝大僧正といふ。本尊大聖不

動尊は、佛法開基の時、天竺の毘首羯摩の作したる不動尊にて、後唐の惠果阿闍梨の持佛となり空海上人入唐して、學成り歸朝の際、惠果阿闍梨より授與せられ、上人歸朝後これを高野山に安置せり。後人皇六十一代朱雀天皇の朝平將門の叛を謀るや、朝廷、神佛の加護によりて朝敵を滅さんことを祈願し、時の高野山大僧正寛朝、輒ちこの不動尊を奉じて下總國公津ヶ原に下り、假段を設けて朝敵勦滅のことを祈りければ、靈驗著しく、幾許もなくして將門滅びぬ。かくて僧正は靈像を奉じて歸山せんとするや、その重量遽かに重くして動かす可らざりしかば、以爲らく、これ靈像のこの地を愛で給ふが故ならむとし、これより伽藍を造營して、神護山新勝寺とぞ號しける。これ實に天慶三年のむかしにして、爾後不動明王の靈驗日々に著しく、利益を受くるものますます多く、伽藍の莊麗いよく加はりて、今に至るまでも地方より參詣者日夜群集す。」

宗吾靈堂

▲成田から電車でんしゃでゆける。佐倉から印旛沼畔を通つて歩いてみるも面白い。

靈堂は、文政十三年に設けられたのであつて、こゝは、義民佐倉宗吾埋葬の地である。
(宗吾が極刑に處せられたのは、佐倉町茨良臺である) 宗吾の墓碑は、其領主堀田氏の建設したもので、奥の院にある宗吾は公津村の生産、本姓を木内と云ふ。寛永の十九年に、堀田正盛が佐倉の城主となつて、大に民を緩撫したので、民大いに心服して居た。然るに、慶安四年に子正信が嗣ぐと、その幼弱を奇貨として奸臣共權を振ひ、年々租税を重くし、その年より高一石に米一斗二升を増した。農民等、共に其苦を訴へしも却つて拘禁せられた。そこで、次第に年貢を納めえぬ者、或は他に移住する者も出て來て、田地もあれて來た程であるのに、更に苛税を課する事二度に及んだので、遂に三百八十九人の名主が、連名で支配の代官に訴へたが、

代官も賄賂だけ取つて少しも取り上げて呉れない。そこで承應三年十月、一同死を決して江戸に出て、藩主に直訴したが駄目。宗吾以下六人は代表者として居残り、當時月番の老中久世大和守へ直訴したが、是も駄目。遂に、將軍上野御成の際、三枚橋下より、宗吾郎自ら直訴して、遂に取り上げられ表沙汰となつて、正信は、藩臣を上京せしめて委細を取調べた。然るに、役人共は、獨自分の非を匿し、宗吾は、上を誣ひ下を罔ひ私利を營む大悪人なりと、異口同音に答へたので、正信も其等の言を信じて奸臣の言ふまゝに、宗吾夫婦は磔刑、子供四人は打首となつてしまつた。然し、此れが爲めに、從來の重税は止められ、藩民の窮境を救ひ得た、間もなく奸臣等二十七名も職を免ぜられ、天下に流浪の身となり、正信も閣老の職を解かれ、其妻は狂亂となつて死んだので、宗吾の家名は相續を命じ、且千葉介勝胤の建てし將門の社へ、宗吾夫婦の靈を祠り口宮明神と崇めたのを、後改めて宗吾社と云ひて今も猶尊敬の中心となつて居る。

靈堂より七八町の所に、宗吾の叔父光膳和尚が住職をしてゐた光膳寺がある。

香取神宮

▲成田鐵道佐原驛の東三十二町。

佐原町は、南總東方の一繁華區で、市況活潑である。町の西北城山に鳥居元忠の城址がある。又この町に、伊能忠敬の子孫がすんでゐる。

神宮は、本邦最古の神社の一つ、常州の鹿島神宮と共に、東國の古祠である。神武天皇の御宇十八年の創建で、主神は經津主神であつて、古來東國無双の軍神と云はれてゐる。社境は、江渚を隔て、東北鹿島と相距ること三里。青山東西南の三面を圍みて、五峯の山と呼び、中央なる龜甲の丘に神宮が鎮座ましくしてゐる。今の社殿は元祿中、徳川綱吉の造營したもので權現造りである、社背に櫻馬場がある。流鏝馬式を行ふ所で、其處に香雲閣が建つてゐる。例祭は四月十四日である。

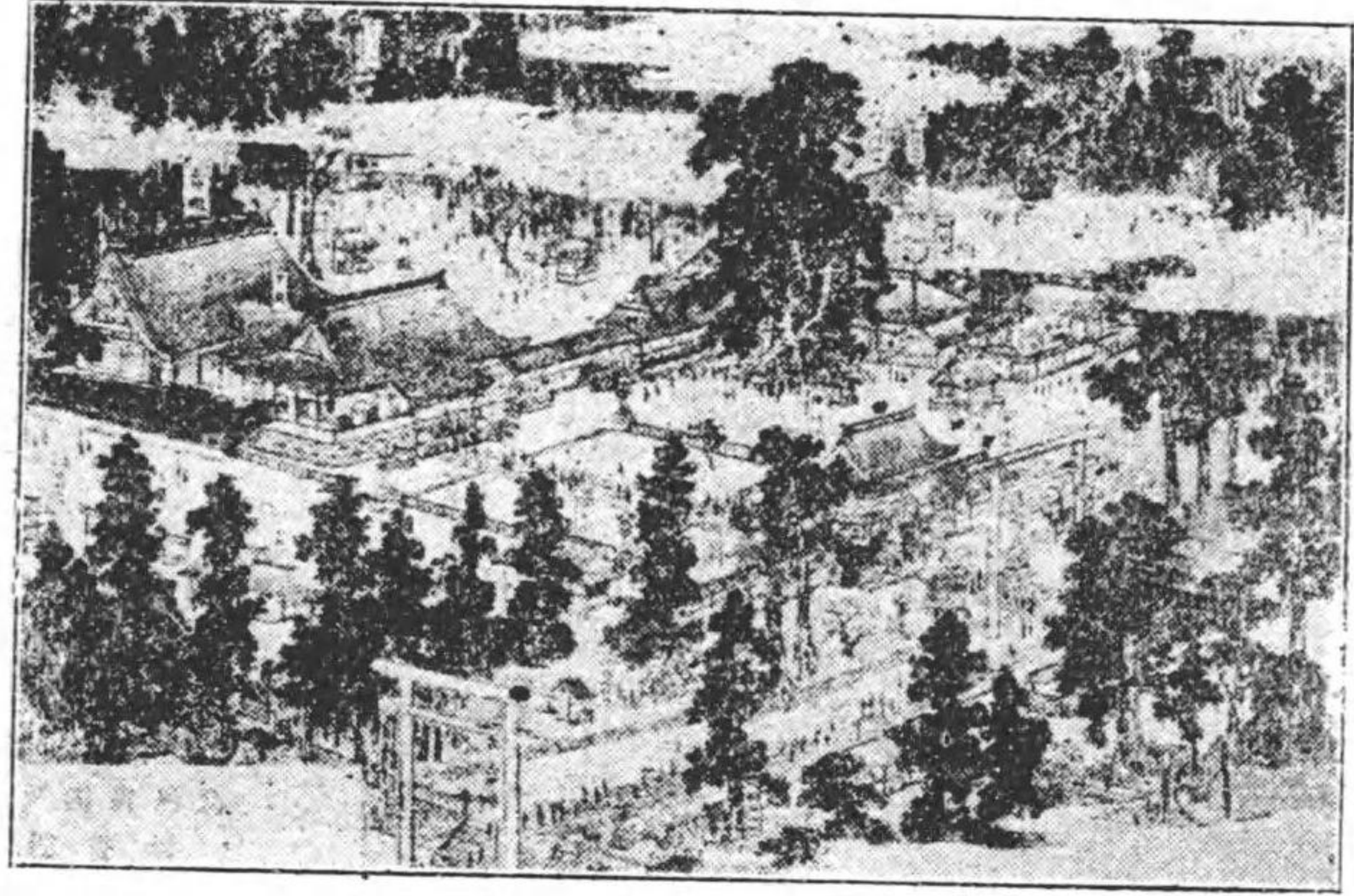
香取潟千重の潮瀬をせきあげて

浪穩に立る神の御門かも

加茂眞淵

香取から鹿島への道中については、八州力士著香取參詣案内に要領をつくしてゐる。

鳥居川岸から川船に乗て、鹿島に往かるには、利根川の流を横切て向ひの堤防の入樋を入て江間を漕抜けると、廣い沼澤に出て(否)沼澤と云はむよりも寧ろ湖水である、これは方今は余田浦といふて往昔の、浪荒き香取の海の餘波である、此湖上の舟中から四方を指顧すると實に活パノラマで、其風光其絶景いふばかりないのである、藻を取て居る舟、釣を垂て居る人實に畫中のものである、此湖水を取圍んで點々たる村落が十六島で、今は新島村といふ、其島中の小流に舟をやる、此處に掛つてある板橋が彼の有名な十二橋である、此處を往抜けるに北利根川に出る、此北向ひの町に三層樓、二層樓等が櫛比して見える、これが湖來の遊廓である、此湖來町は常陸國行方郡の小都會地であつて、往昔から「いたこ出島のまこもの中」にあやめさくさはしほらしや」と俗諺にうたはれた名所である。



香取神社

儲此潮来といふ處は上古の香取の海海濱であつて鹽を焼た處である、それは常陸風土記と云ふ書に、

往南十里板來村近臨海濱云々其海燒鹽藻海松、白貝、辛螺、蛤、多出。

さかういふてある。これは元明天皇の御宇和銅四年上牒せしめられた書で今を去る千二百年ばかり昔のものである、又此邊一體は大船の香取の海であつて霞が浦は云も更なり上は印旛郡の木下シ地方から稻敷郡の龍ヶ崎あたりまでは、即ち、一體の海で、衣川、小貝川の吐入口から昔の河内郡現今の稻敷郡の低地は漸々泥土が沈澱して、葦原となり、沼澤となつて、それから後に谷原郡の

各村落が拓けたのである。

儲此あたりが如斯に村落に開けたのは漸く三百二三十年以後逐年の事であつて、それは天正十八年に小田原城が陥落して關東八州は徳川氏が領有せられ、江戸に覇府を設けられて後に利根、渡瀬、兩川の水の汎濫を防がんと堤を設けて権現堂川を締切り江戸川の新開を斷行して關宿に抗出したを設け逆川を開鑿して、衣川常陸川に逆行せしめ、且布佐臺と布川臺との峽地を中斷して、木下シに至るの一流を設けて中利根川といふが出来た其後逐年上流から押出した淤泥が急遽に沈澱して下利根沿岸の田地は開けたのである。天正十八年に石田駿河といふ人が徳川内府に懇請して香取の海の沖の島を開墾し新田を開きてこれを上ノ島といふた、今本新島村の上ノ島といふ處である、それから此見ゆる處の新島の區々は寛永の年間に濟々に開いて、ここに幕府が獎勵して沈澱した泥土の洲渚に葦を植ゑ蒲をうゑしめて田地を得る事に力を盡し、方今では嚴堤の四方に回つた立派な郷村となつて稻田万頃、新島米の名は江湖に普く一の國産となつたのである、曩に下利根川河川改修工事の浚渫船で泥をさらひあげた二十七尺の底からは辛螺貝や蠣貝などの化石したものが澤山出た、即ち太古の香取の海の餘波たることはこれで

明瞭である。

成 東

▲成東驛下車

成東は、山武郡の一邑で、古書に、鳴戸、鳴土、鳴渡に作る、九十九里の海岸の中心片貝鳴濱兩村へゆく近道である。片貝へは、直徑一里半にすぎない。街西入道山に古城址がある。天正十八年家康入府の時、石川長門守康道當城二萬石に封ぜられた。元和六年廢城となり、其後結城藩水野氏の陣屋がおかれた。

驛の東南六町に浪切不動尊があり、堂下に、成東鑛泉がある。不動尊は古來俗信の的となつてゐる。

九十九里濱

夷隅郡の東北端大東崎から下總海上郡、飯岡に至る砂濱十五里程を九十九里濱と云ひ、

東海無双の漁産地である。九十九里とは、古道六町を以て一里と算したが故である。この地の漁業は、元和年中より緒についたのである。元和年中、紀州賀田浦の漁夫、大甫七重郎、上總片濱矢之浦に至り始めて鰯網を使用した。後一宮の浦人、三代力と稱する船制を創め、九十九里濱の地引網が始められた。これ迄は地曳網はなかつたのである。九十九里濱へは、成東驛よりゆくもよし、又八日市場驛からゆくもよい。八日市場驛から二里にして、海岸へ出る。地曳網の壯觀に接することが出来る。

芝山仁王尊

▲松尾驛及び横芝驛より二里。

芝山の里に、天應山觀音寺聖福院と云ふ古刹がある。(天台)本尊は慈覺大師の作十一面觀音像で、古來、秘封して人の見るをゆるさない。仁王尊は、毘首羯摩の作と云はれる稀代の名像で、山の金光寺から移したものである。寺境幽邃、天應年間創建の古刹と云ふも

理りにこそ。什寶に巨勢金岡眞筆の紺地金泥の阿彌陀尊がある。

松岸の里

▲松岸驛下車。

松岸は、西銚子に接し、利根川上下の舟航の繋ぐ所で、古來重要な地點を占めてゐる。妓樓あるを以て有名である。

總常日記に曰く「松岸といふに船泊てたりこゝより飯沼かけて岸に臨める家居とも見わたすに時知らぬ雪の降り積みたる心地するは皆蠣の貝もてふけるなりけり、此川にて蠣の多くとらるゝこと思ひやるべし」銚子附近にても此蠣屋根多い。

今も猶銚子沿岸の、漁夫は、大漁の時にあふや、遠くより此の地に來りて遊ぶを常とする。海上八幡宮は、治承年間以來の古祠で、潮干祭りは、今猶所の名物である。

銚子附近の名勝

利根川の河口に位し、犬吠岬の北側にある大邑である。港頭岩礁多く大船巨船を泊せしめることは出来ないけれ共、東海岸數十里他に良港なきを以て一要港たるの實を失はな

50

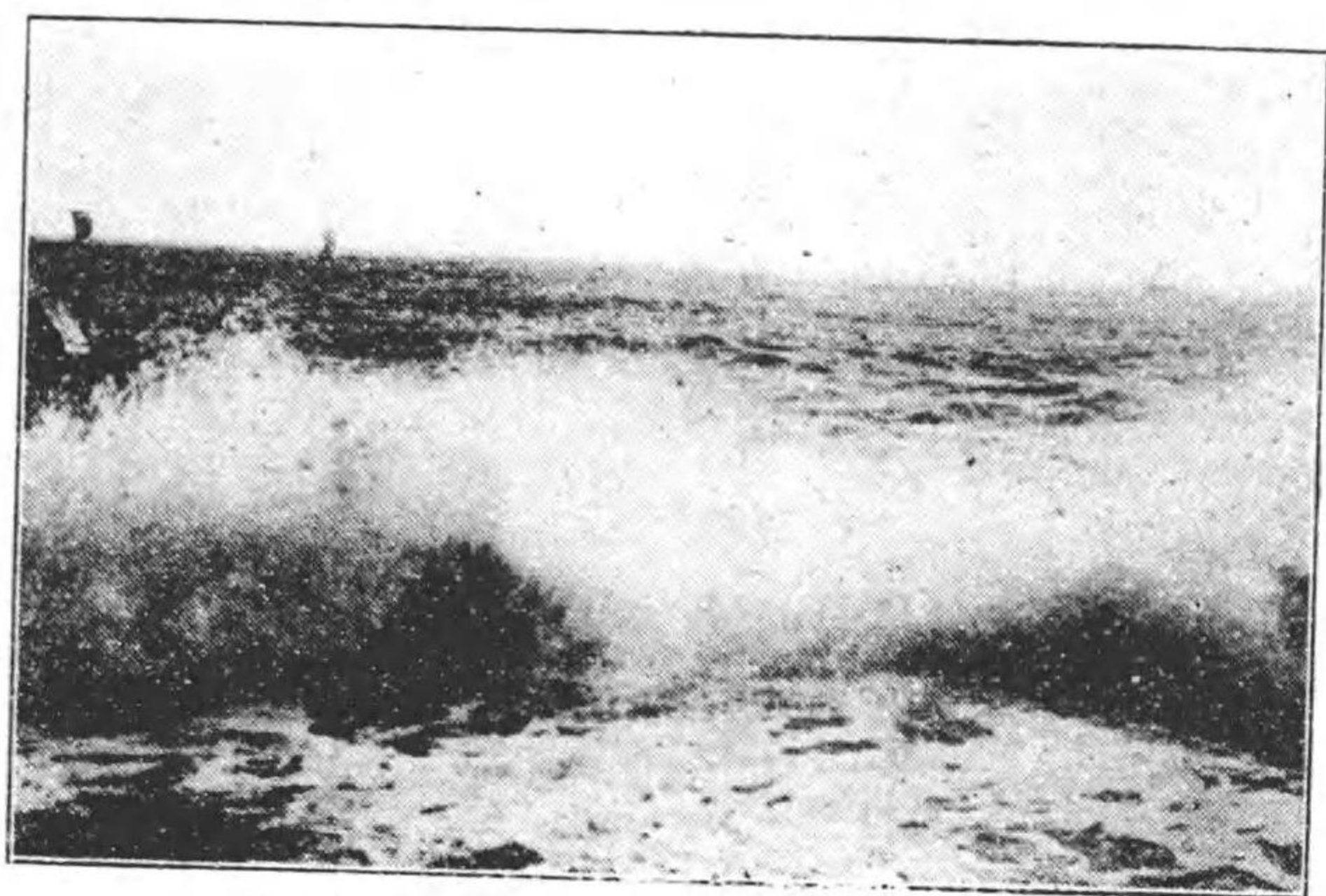
舊名銚子浦と云ひ、此海門に銚子口の險奇あるに起る。此銚子の名につき紀州の人崎山治右衛門影堂の銘に「海上郡の三崎の庄に銚子浦あり、洪川の海に注ぐ處、酷だ迫窄して其水銚子の口より出るに似たり、仍て浦名と爲す」とあり、此銘の成れるは寶永二年なりといへば、それよりもいと古き時代の名なるべし、此地鎌倉の始めには片岡八郎景春の領地なりしが、爾來千葉海上兩家に屬し、天正十八年徳川氏の領地となり、文祿二年松平外記の知行所となり、更に間部越前守に屬し、享保年間再び天領となり、更に松平右京太夫に屬し、終に維新の時に至りて高崎縣となり、又新治縣となり、明治八年始めて今の千葉縣

下となる」(總武線案内記)

この地漁師多く、風俗は、極めて淫靡である。特産物としては、銚子縮、醤油、甘露等である。

(イ) 圓福寺、町の東端にある。飯沼山と號し、神龜元年僧徳道の開基、阪東二十七番の觀音靈場である。眞言宗にして十一面觀音を安置してある。寺境村丘により、北銚子港に臨み風光絶佳である。境内に一基の古碑あり瀧川一益の墓と云ひ傳へてをる。或は三好長慶の墓だとも云はれて居る。

(ロ) 川口明神 圓福寺背後の川口山にある。俗に白紙大明神と云ひ、安倍晴明の戀人が海中に身を投じた所と云ひ傳へてをる。川口には、又千人塚がある。海中で溺死した人々の爲めに建てたものである。利根川の圖誌に「漁船沖に出で、風あしくして歸おそき時はこの千人塚の上にて火を焚き、川口のめじるしとするよしにて頂に火を焚きし跡ありしと。又塚のわきに、砲臺の遺墟がある。



銚子名所(屏風ヶ浦の壯観)

(ハ) 犬吠岬、犬吠は犬坊にも作る。銚子町より一里。本邦著名の岬角で、岩壁の頂上に旋廻白色の一等燈臺が設けられてある。燈臺の高さ百六十八呎、犬吠岬を北に下れば君ヶ濱それに隣りて海獺島がある。昔は海獺が来て、上になり下になり狂ひ遊んださうだ。

酉明ヶ浦の海水浴場も程近い。

房總線

小弓御所址

▲蘇我驛下車東南半里。

小弓は、生實、御弓にも作る。

享祿年中、關東公方足利義明、古河より参り此に寓して、小弓御所と稱した。郊外の史蹟云ふ。

生實は小弓、御弓に作り小弓御所の址である。近世は森川氏一萬石の陣屋地であつて村の北西には其壘濠の遺が猶残つて居る。代々千葉氏の一族の居城であつたが、享徳年中(約四六〇年前)城主原胤高が小金城に移つた後、上總小西城主肥前守胤繼が居た。其子友幸は上總の眞里谷三河守武田豊三と境界争をして居たが、千葉氏は友幸を助けたので友幸が

常に勝つて居た。當時古河公方政氏の二子義明が、父と兄高基とも意合はずして陸奥に流浪の後里見氏をたより上總八幡宮に居たが、房總の軍士來附する者多くあつて中々優勢であつた。負けた武田方は、此義明を味方として友幸を小弓の城に攻めて遂に陥れた。翌年義明此處に移つて小弓御所と稱した。然るに、天文七年になつて小田原の北條氏綱が古河公方を平定し、次第に關東を平定するの際、里見氏と共に出で鴻の臺に戦ひて、遂に破れて城と共に没落した」と。

大巖寺

小弓城址の北八町、天文二十年の草創。浄土宗の古刹で、關東十八檀林の一である。中興は江戸増上寺九世道譽上人である。この寺創立の當時は、玄忠院と稱した。

本國寺

▲大網驛の北十町。

日蓮宗の古刹である。往昔は眞言宗にして、善興寺と稱したが、文明三年城主酒井越中守定隆が日蓮宗に歸依した時改宗せしめられたのである。

境内にある八幡神社はもと折戸にあつたのだが、酒井氏土氣城を築くに際し(大網の)鬼門鎮護の爲め遷座したものである。

大網から成東にゆく東金線の東金驛附近には、東金城址、本漸寺(元は天台宗、今は日蓮宗)、八鶴池(直五町の一小池だが)西福寺(もと天台宗、今は日蓮宗)等見るべきものが多い。風光は頗るよい。

土氣城址

▲大網驛の西一里強。土氣驛下車數町。

天正十八年以前、酒井氏が時めいた頃には、土氣は市府をなしてゐたのであるが、酒井氏が亡んでから、其繁盛は、大網に奪はれた。城址は町の東北にある。酒井定隆の築城にかゝり要害堅固、無双の名城であつた。城址の南に善勝寺がある。元は眞言宗であつたが酒井氏が日蓮に歸依した時、日蓮宗に改めた。城址の東麓に、當國無双の名瀑、清峯寺の瀧がある。

法光寺

▲土氣驛の東北一里。

大和村字田中にある。長享元年酒井定隆の草創で、開基は僧日泰である。云ふ迄もなく、日蓮宗である。

寺記の語る處によれば、當寺第二世の僧日行、嘗て隣村福依の本福寺に在り。一日當寺に歸らんとして、途上一兒を抱ける瀕死の女に逢ふ。女、僧の袖を引いて暫らく兒を抱か

ん事を乞ふ。諾して之を抱くに重き事石の如く、氷の如く冷たし。僧即ち一念口に誦經するに、女深くその高德の濟度するものありしを謝し、報ゆるに一玉を以てす。今之を寺寶とし産の玉と名づく。晴雨即ちその清濁を變ずといふ。山號を寶珠山といふ。寺の南一町許にして赤人塚あり。塚は水田の叢樹の中にあり。赤人は上總國山邊郡の人にして、地にその廟ありとは、多くのものに散見する處なれど、今は之なし。廟の廢されて残れる塚か、又は誕生地の紀念として建られたるものか、考證未だ定かならず。又法光寺を東南に距る五町餘なる路傍に小祠あり。社背に一老松の蟠屈して翠傘をなすあり。社は水神にして、松は水神の松と稱す。往昔、北條氏との戦亂に、里見義弘、國府臺に敗れ、東走して此に來り、松下に露臥し天明を待てりといふ。村の字山口なる一丘岡の麓に千段穴と稱するものあり。洞口は東面して徑二尺に過ぎず。入れば一穴ありて約二坪あり。北隅の小穴を入れれば第二穴あり、數十人を入るべし。之れの西隅も亦第三穴に通じ、廣さ第二に等し。かくて第四、第五殆ど限なきが如けれども、洞内の斯く蓄積して呼吸點火共にその極まる所

を知る能はず、村の大字小西に妙高山正法寺あり。日蓮宗に屬し、後花園帝の長祿二年、郷主肥前入道行朝の居館を以て、僧舎となし、開基として僧日意を聘する所なり。天正十八年、日悟、允可を得て、こゝに檀林を設置し、寛文四年、日堯幕府に入りて説法、賞として東金町の徳川家假館を賜はり、大講堂となせる事先述の如し。又字小西城山の東嶺に少彦名命社あり。山はもと原能登守胤繼の據る所、百餘の石階、老幹密葉の下に通じ、閑寂として深谷の氣に充實す。此の山の谷つゞきに雄蛇池あり。谿間堤をなして池の周圍殆ど半里、小湖の如し。冬は水禽集り來るが故に、里人網を用ひて之を獲るを業とす。池は往昔徳川氏の代官島田某來りて近村の灌漑に乏しきを見、承應二年之を竣工す。

笠 森 寺

▲茂原驛より西三里。

驛の近くに茂原寺(藻原寺)がある。常在山と號し日蓮宗の古刹で

ある。

大悲山笠森寺は、延暦三年傳教大師の開基と云ひ傳ふる古刹で、中興は叡山の僧覺超である。(長久元年)僧日蓮が未だ一宗を開かざる時、當山に參籠七日を費せし折の詠歌に袖に合ふ涙の雨のぬれしとて

今日笠森を尋ね來にけり

日蓮上人自筆の法華經一卷、傳教大師唐土よりもたらせし、錫杖を始め寺寶頗る多い。境内の觀音堂は、阪東巡禮卅一の札所で、天正中北條氏の兵火を免れた。

玉前神社

▲一ノ宮驛の西北四町。

一ノ宮は、加納氏の舊治所、今では、海水浴地として知られ市況活潑である。永祿天正の頃内藤久長及び正木大炊介の據れる一ノ

宮城址は、町の西部城山にある。

祭神は玉崎神で、上總の國の一ノ宮である。社は不幸北條里見の鬪争の地にあつたがゆゑに、幾多の兵燹を経て、記録寶物の一切を失つてしまつたのは、惜しむべきことである。今では社格は國幣中社である。

玉前神社、前或作作埼、今在長柄郡一宮本郷村、稱玉前明神、按諸神鎮座記云、祀大已貴命、是蓋以玉前爲前玉、遂附會幸魂、不可信也、神名帳頭註、一宮記、爲高皇產靈命孫玉前命、然玉前命古書無所見、或云、祀海神玉依姬亦無確據、古今著聞集、載延久二年本國一宮神憑人云、懷孕三年、産明珠云々、似是女神、然其事怪異、不足信也。

大多喜

▲大原驛から人車鐵道の便がある。

夷隅川の峡谷、峰巒四周の中にあり、東上總の大邑である。古書に大瀧、大田木、緒瀧等並用せられた。里見氏の時其臣正木氏この地を守つた。徳川公入部の初め重臣本多中務

大輔忠勝をおき、元祿以來は、大河内松平氏の治所(石二萬)となり、以て王政維新に至つた。正木大膳憲時の肩尖刀を藏する臨濟の古刹天目山同照寺は、國內屈指の古刹である。大膳は性勇猛里見氏を滅ぼさんとして臣下の爲めに刺殺された。

勝浦城址

▲勝浦は東海に於ける一名港である。沿海漁業の中心地で市況活潑である。この邊一帯の海岸を櫛濱と云ひ、遠見岬神社からの眺めは特によい。

城址は八幡岬の頂上にある。嘉吉元年正木右近太夫頼忠修築して、子孫こゝにすんだ。其後多少の變遷はあつたが、天正十八年廢城となる迄、地方の名城であつた。幕末海防論やかましい時に當り、岬上に砲墩を築き、警兵をおいて海防に備へた。弘化三年に始まり王政維新に及んだ。

小湊誕生寺

小湊は、上總勝浦驛から下車して、房州への入口である。勝浦の西南四里、自動車の便がある。途中おせんころがしの勝がある。この地は僧日蓮の誕生地で、その史蹟に富んでゐる。宗祖日蓮は、貞應元年二月十六日父貫名重忠の居館に生れた。今、誕生寺の東南蓮華潭である。建治二年、弟子日家、師の爲めに精舎を遺址に創建したが、明應中の地震海嘯の爲に精舎は海中に没した。依つて之を妙ノ浦に移した。然るに元祿中再び地震海嘯の害を被つたので、現地へ移した。地震に祟られた本寺は、嘉永中、火災にかゝつた。今の殿堂は、其後の新築である。寺田五十石。

鯛の浦(妙の)は、明應年間の地震で海になつた所で、無数の鯛がすんでゐるので、妙と鯛と通ずるに至つたのである。附近にある、妙蓮寺、高生寺、日蓮寺何れも、日蓮とゆかり深き寺である。

清 澄 寺

▲小湊から二里半。

寺は清澄山中にある。(最高峰妙見山は海拔三百八十餘米。農科大學の研究林がある。)房總史料云ふ「千光山清澄寺は、寺領二百石、神武帝の時天富命を崇めし靈場なり。光仁帝寶龜二年、當寺草創と傳ふ」と。眞言の靈場で、承和年間慈覺大師當山に來り不動明王を刻して以來其名天下にあらはるゝに至つた。往古より斧鉞の濫入を禁止したので老樹鬱々としてゐる。

朝日森は、日蓮の靈蹟である。本化宗徒の説に、「建長五年四月二十八日、日蓮大士此に登り、旭日を迎觀して感得する所あり、即南無妙法蓮華經の題目を唱ふ。是れ大士一宗興立の發祥なりき」と。

小松原鏡忍寺

▲鴨川驛下車。自動車の便がある。

日蓮上人、四大難中の一靈場で、日蓮宗一致派の本山である。文永元年十一月、宗祖日蓮此地に於いて、東條景信の爲めに要撃せられ、弟子鏡忍坊日曉殉難す。工藤吉隆急を聞いて赴援し、又重傷を負うた。日蓮身を以て僅かに免れた。

吉隆死に瀕し、宗祖の恙を喜び、遺腹の兒男ならば法子たらしめんことを請うて、この世をさつた。吉隆の遺腹の子は男であつた。其兒は、宗祖の弟子となり、長榮坊日隆と稱し、弘安四年宗祖の命をうけて、鏡忍坊及び亡父の菩提を弔はんが爲めに草庵を營んだのが本寺草創の由來である。

附近に、袈裟山掛松寺がある、宗祖法難と關係深い寺である。

北條線

飯香岡八幡宮

▲八幡宿驛の西二町。

當社は、天武帝の白鳳年間勅使從三位季滿、奉勅して東に下り、勸請した古祠で、譽田別尊、息長足姫尊、王依比貴尊の三座を本殿に祠つてある。神域一萬二千坪。眺望頗るよい。勅使季滿の手植にかゝる大公孫樹二株が、本殿の左りにある。季滿卿の歌に、
君が爲め今うるそへし銀杏木に

幾世へぬとも神やどるらんとある。

市原村字加茂にある高瀧神社に近き總社に國分寺がある。上總國府址は現在不明だが

蓋し、この附近に求むべきである。

木更津

▲木更津驛。

西上總第一の大邑で、盤州と富津の兩沙嘴、左右に斗出して、海水灣をなす。義經記「きそうとの」湊とあり、回國記には「きさらづ」と云ふて居る。國誌云ふ、「古に所謂君不去之地乎。日本武尊總地にわたるや、颯風にあひて寵姫を失ひ、追慕已まず、北海涯に彷徨し、數日去るに忍びず、時人其地をさして君不去と謂へり」と。蓋しこの説後世の附會であらふ。

驛の北十五町に、吾妻神社がある。日本武尊の妃弟橋姫を祠れる古祠である。

久留里城址

▲木更津から久留里線に乗り替へ終點で下車。城址は驛から十一町。

久留里は、小櫃川の上流にある名邑。城址は今公園となつてゐる。久留里城は、里見氏が全盛時代に築いたのである。天正十八年、大須賀五郎左衛門忠正、當城の主となる。其後城主數回交迭あり、寛保三年以來王政維新迄は、黒田氏三萬石の本城であつた。(城のあ
浦田山
と云ふ)

大友皇子の遺蹟

松丘村大字大戸見(大反の)に、大友皇子が、矢ノ根を以て地を穿つて植ゑたと云ひつたへられてる三本松がある。(松の葉悉く)又小櫃村大字徳田には、大友皇子及び皇妃菊理比賣命を祠つた白山神社がある。

大友皇子は、近江の山前で死すと傳へられてをるが、夫れは、皇子の計略であつて、實は此地に落ちのびて餘生をおくられたのであらふとの説もある。眞偽は詳かでないが、一説として傾聽せねばならない。社の南方の一丘は、皇子の陵なりと云ひ傳へられてある。又貞元村には、貞元親王の墓があり、定福寺は、親王の菩提所であつたと傳へられてゐる。この附近の史蹟めぐりも面白い。

鹿野山神野寺

▲木更津の東南四里自動車の便がある。又佐貫驛からは二里。

鹿野山は、海拔三百五十米、山上に、神野寺がある。承和年中創建眞言の古刹である。門前の民家を山宿と云ひ、旅館がある。絶好の避暑地である。回國雜記に
鹿野山と云ふ靈場に詣うで、
鳴く鹿の野にも山にもきゝぬなり

妻こひわぶる秋の夕ぐれ

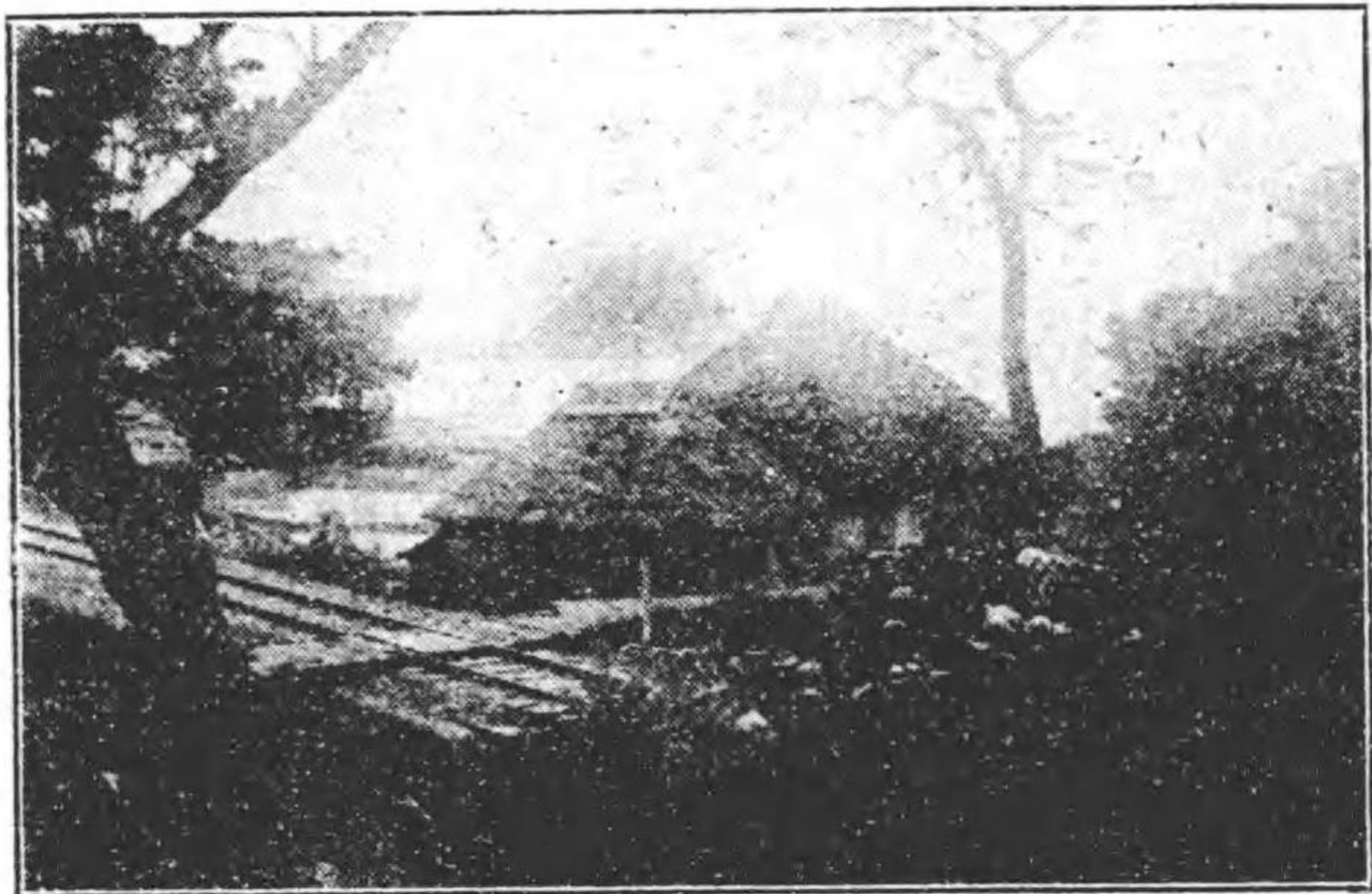
近世、國史に迎合して、日本武尊に附會し、其靈蹟を説き「當山神野寺は、日本武尊、橘姫尊兩神の鎮座にして、軍荼利明王、藥師二尊の垂跡を以て長く鎮護となす」と附會するに至つた。山中九十九谷の大觀は雄大である。

鹿野の山つゞき、鬼泪山には、日本武尊東征の際、凶夷鹿野山より追れて此の山に入り遂に尊の追跡にあひ、鬼の目に泪を流してあはれみを乞ふ。名の起る所以なり」との傳説がある。

鋸山日本寺

▲保田驛から山麓迄十七町。頂上迄一時間でゆける。

鋸山は、海拔千百八十尺、頂上に十州一覽臺あり眺望雄大である。一名もとな山、明金山、保太山と云ひ、鋸の名は山の形狀から起つたのである。貿易備考に、「房州石は方言荒



るみを島浮りよ内境寺本妙

石と稱し鋸山に出づ」とある如く石を切り出してゐる。山の中腹に日本寺がある。聖武帝の勅願寺、行基の開基と云はれ、初め天台宗であつたが、今では曹洞宗である。安永中、高雅遇傳和尚來仙して、石匠大名甚五郎と協力して石佛一千五百三體を造置した。保田羅漢の名は、天下に著はれてゐる。寺には、海中出現の鐘と稱するものがある。(元享元年作) 保田には、

安房で名所は妙本寺池の反橋糸柳金の柱は十二本

と俗謡にある日蓮宗の古刹妙本寺がある。建武二年の草創である。

安房勝山

▲安房勝山驛。

岩井と保田との中間にある港泊で、寛永二年以後陣屋がおかれ、酒井氏が之を守つた。
(食邑一萬) 往昔安西氏世々此地に住した。「頼朝石橋山の合戦に敗れて眞鶴崎より船に乗じて、本州獵島に至るや、城主安西三郎景益家臣を卒ら第一に旗下に屬し忠勤を抽んでた」と云ひ傳へられてをる。安西氏居館の址は、今畑地と化してゐる。

勝山港の屏障となすは、浮島である。高橋氏は、「景行天皇五十三年八月、行幸伊勢、轉入東國、冬十月、到上總國安房浮島宮の舊蹟を此に擬してゐるが、この説は首肯出來難い。又頼朝が、石橋山の合戦後、眞鶴崎より舟に乗り、最初に漂着したと云ふ龍島(獵島)は市巷の北、少許を隔つる魚巷であつて海島ではない。

富山

▲岩井驛より十七町、驛より十町に高崎鐵泉がある。

富山は、海拔千二百尺、郡内有數の高山で、馬琴の八犬傳で有名になつた。山上四字形をなして南北二峰に分れてゐる。南峰頂上に、仁王門觀音堂がある、本堂は孝謙帝の御宇創造せられたものであり、觀音の像は行基菩薩の彫作と云はれてゐる。北峰に觀音堂がある。眺望雄大である。

那古寺

▲那古船形驛の東五町。

那古山の中腹にあり、阪東三十三所觀音の一である。補陀落山千手院普門坊那古寺と號して、千二百餘年前僧行基の開創したものである。俗信の的となつてゐる。

那古の浦の霧のたえまにながむれば

夏も入り日を洗ふ白浪

回國雜記

本堂、多寶塔、大日堂、阿彌陀堂、閻魔堂、鐘樓二王門等相連るが上に末高き尖岩の時つありて、絶頂松樹鬱蒼として茂生す。本堂は四面八間にして構造の美刻縷の精緻なる附近その比に乏し。寺の一名那古觀音と號するは本尊、行基僧正の作にかゝる千手觀音あるが故にして、これに賽するもの常に群來りて、香煙の色四時堂内に充つ。毎歲六月十七日、及び七月八日を以て會式となし、賽一日六千を下らずといふ。當國五大寺の一にして補陀洛山普門坊千手院と號す。新義眞言に屬し、元正天皇の養老元年の草創、行基僧正の開基なり。一度荒蕪に歸したるも、仁明の承和十四年慈覺大師來りてこれを再興し、後建久年間源頼朝報恩の寄附として、現今存する所の本堂、三層塔、仁王門を建つ。傳説によれば地は太古拘那含佛が説法の靈地なり。後之を那古と訛ると。

驛より一里延命寺は、當國五大寺の一に列し、里見義成の子義通以下忠義迄の墳墓がある。

永正十七年里見實堯の草創、僧梵眞の開基である。

安房神社

▲安房北條驛より西南三里、自動車、俣の便がある。

北條と館山とは、共に、館山灣口に臨んでゐる。市況活潑である。

古史に見ゆる淡水門は、館山灣内に求むべきである。國誌云ふ

「館山、元里見氏居り。其後松葉氏陣屋を設けてこれに居る」

と。城址は市街の南にあり俗に根子屋山と云うて居る。

北條は、里見義豊の時、安西氏居住し、徳川氏に至りて、屋代氏

水野氏之れに居住した。北條陣屋の址はつまびらかであるが、城

址は分らない。

安房神社は、天太玉命を祀り、官幣大社である。神社のある所は、安房國の南端で、三面山を負ひ、西の方海にのぞんでゐる。風光明媚である。延喜式には、「安房坐神社、名神

大」と見えてをる。一宮記に「安房神社、號洲崎大明神」とあるは、誤りで、洲崎神社は西岬村字洲崎の御手洗山にある。洲の崎は安房の西南極に當り、東京海灣の門戸に當り、要害の地なれば、文化五年に砲臺を築いたことがある。砲臺址は今もある。

神武天皇元年、天富命、阿波の齋都を伴ひ、東北に移住し、麻糸米の類を栽培した。これ安房の名起る所以である。この神社の草創も、神武の御世であると云はれて居る。

稻 村

▲北條町から國分寺を経て稻村迄一里。

稻村には、里見の故墟がある。里見義實之を築き、白濱より移居し、子孫三代この所に住した。

里見氏は、戰國の世、絶大の海軍力をもつて、小田原の北條氏と相對抗した。陸戰は、國府臺に於いて二回敗れてゐるが、海軍力を以て、北條氏を常に壓してゐた。

白 濱

▲北條から白濱へ自動車賃一圓二十錢、千倉から白濱へ自動車賃一圓。

白濱は、房總半島の極南端で、有名な野島岬の燈臺は、東緯三十九度五十二分、北緯三十四度五十三分の地點にある。雄大の風光愛すべきものがある。野島岬に、嚴島神社がある。頼朝曾て海を航して此地に來たり、武運長久を祈願して此社を祀ると云はれてゐる。

この地は、嘉吉の亂後、里見義實が始めて安房の國に入りし所で、城址、館址、義實義成の墳墓を有する杖珠院がある。義實の墓は、墓石表面は「捐館、杖珠院殿、建室與公大居士、尊儀」と刻す。明治八年に建てたものである。村の中央なる山の麓に、弘法大師手植の芋がある。この葉は四時青緑にして枯れることがないと云はれてゐる。尙村内に芋洗の井戸がある。

此の地を訪ふて里見九代の古へを、追憶するも興多きことである。

仁右衛門島

▲大海驛の海岸にある。

海岸を距る一町、周圍約十町の一小島だが、源頼朝の傳説をつたへて、其名普く天下にあらはれてをる。

傳へ云ふ、治承四年源頼朝石橋山の合戦に敗れて此地に遁れし時、仁右衛門なるもの篤く禮事して頼朝の危難を救つた。頼朝之を徳とし、賞としてこの島を仁右衛門に賜つた。現在仁右衛門の子孫平野仁右衛門老がこの島に住んでゐる。島内に、頼朝の隠窟、日蓮上人禮拜所、神樂岩、辨天祠等がある。

猶大海驛で下車したらば、「名馬の洞穴」の奇勝を探ることを忘れてはいけない。「此處からは、義經が鴨越に用ひた太夫驢が出た所だ」と云ふ傳説はさておいて、天下に誇るべき奇勝である。

下立松原神社

▲千倉驛下車。

千倉驛を距る西一町餘、健田富士がある。山容宛ら富士に似て、山頂よりの眺望は雄大である。山麓に、下立松原神社がある。祭神は天日鷲命、本花開耶姫命、月夜見命であつて、當國屈指の古社である。鎮座の日は遠く神代にありと云はれてゐる。

治承年間、源頼朝石橋山の合戦に敗るゝや、磨五郎信俊を嚮導として、この境内に至りその祖頼家義家の靈を祀つた。これ現今の御靈大神及び白幡大神である。

莫越山神社

▲北條から三里。

莫越山神社は式内の古社で、神武紀元の始め、天富命、阿波の齋部を伴ひ來り齋する所

にして、手置帆負命及び彦狹知命を祀つてある。後元正天皇養老二年に、彦火々出見尊、豊玉比咩命、鵜鷄葺不合尊を合祀した。中世兵亂の前は、神殿四所に設けられてさながら大規模の宮殿の如き觀があつたと云はれてゐる。現今の社殿は、明治十九年十一月の竣工である、一度は來り訪ふべき靈地である。

我が背子が莫越の山の喚子鳥

君よびかへせ夜の更けぬまに

石 堂 寺

▲北條より莫越をこえて三里半。

石堂寺は、丸山川の上流にある、神龜三年行基僧正の開基にかゝり、慈覺大師を中興の祖としてゐる。比叡山延曆寺の末派で、天台宗に屬してゐる。本尊は行基僧正の作にかゝる十一面觀世音、二王門には、運慶の彫刻せる二王尊の像が鎮座してゐる。寺寶中特に著

名なのは、阿育王の塔及び智澄大師自筆の不動座像である。

暇あらば、石堂寺から大井に出で、安房第一の高峰愛宕山(千三百七)へ登るも面白。

大正十五年七月一日印刷
大正十五年七月十日發行

(定價貳圓參拾錢)

著者 橫井春野

發行者 東京市神田區美土代町二丁目一番地
中村德二郎

印刷者 東京市神田區三崎町三ノ九五番地
松岡虎王齋

檢
印

發行所 東京神田美土代町二ノ一 白揚社

電話神田(25)二二八五 振替東京二五四〇〇

556
71

15年10月5日

伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐
伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐	伊佐

伊佐

終

